

暁の大地

1

成尾

陽

目次

- 一、 大本はなぜ生まれたのか ◆ 9
- 〳〵をまつる？ ◇ 9
- 宇宙のはじまり ◇ 18
- 〳〵の大元霊〳〵の霊、力、体 ◇ 26
- 天と地のはじめ ◇ 36
- 三体の神 ◇ 44
- 国祖ご退隠と天地の神 ◇ 53
- あゝ大変 ◇ 62
- 神約 ◇ 70
- 七五三繩と調伏行事 ◇ 79
- トイレの神さま ◇ 88

国祖のご再現 ◇ 97

神と神との約束 ◇ 105

二、あの子とみたままつり ◆ 114

先祖のまつり ◇ 114

祖霊とは ◇ 123

霊界と現界の違い ◇ 131

三途の川と中有界 ◇ 139

不老不死の妙薬 ◇ 147

自分で造ってしまふ地獄 ◇ 155

魔王とサタン ◇ 164

中有界での面会 ◇ 171

天国へのアプローチ ◇ 180

写し世 ◇ 190

天人の職業 ◇ 198

天人の貧富 ◇ 206

三、節分こぼれ話 ◆ 214

節分のうどん店 ◇ 214

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年と二十三年の機関誌「おほもと」と、平成二十四年以降の機関誌「みろくのよ」に連載したもので、登場人物は実在の人物ではありません。

暁の大地
1

一、大本はなぜ生まれたのか

“鬼”をまつる？

「鬼はあゝうちい、福はあゝうちい」

まだ夜も明けやらぬ午前四時すぎ、掛け声とともに、たくさんの豆がまかれていく。人いきれの中、人々は歓喜の声をあげながら、われ先にと、豆を拾っていく。

大勢の人に交じって一人の青年・雨宮大地あまみやだいちも、畳にちらばった豆を拾い集め、ポケツトに詰め込んだ。

横を見ると、大地の祖父、梅木松太郎うめきまつたろうは、持参した大きめのビニール袋の口を広げ、飛んでくる豆を上手にキャッチしている。手慣れたものである。周囲を見回すと、皆、喜びに満ちた良い顔をしている。

ふと、大地は今までにない晴れやかな気持ちになっている自分に気づいた。「どうしてだろう」と思った。

考えてみると、今この場にいること自体が不思議であった。

前日、長野に住む大学四回生の大地は、長野駅から中央線の特急「しなの」に乗り、京都へ向かっていた。先月二十二歳になった大地は、本来なら就職先も決まり、信州のゲレンデで好きなスノーボードでも楽しんでいるはずであった。

ところがこの就職氷河期である。いくつもの企業をまわって就職活動を続けたものの、採用してくれる企業はなかった。あせりといら立で気持ちもめいつていた。家族の期待もあり精神的に追い込まれていた。そんな時、「綾部へ行って来たら」と母・京子にすすめられた。

綾部は京子の故郷であった。大地も小さい時は、両親に連れられてよく里帰りしていた。だが、高校二年以降、足が遠のいていた。

「もう五、六年は行ってないなあ。気分転換に行ってみるか」、電車に乗ったのは、二月三日の早朝であった。

「昼すぎには綾部駅に立っていた。」

「大地か」

歩み寄って来たのは、祖父の松太郎だった。

「お、よう来た、よう来た。立派になったなあ」

「おじいちゃん、お久しぶり。元気だった？」

「ああ、元気にしたよ。さあ、まずは家うちに行こう」

軽トラの荷台に荷物を積み、駅を出た。七十歳を過ぎたものの、日ごろ農作業で体を鍛えている松太郎の運転は、まだまだ健在だった。大地はルームミラーにぶら下がって揺れている。「祓はらいの証」に気づき、「節分のお守りだね」と言った。

「そうだよ、今年も新しくなったんだ。今夜が節分大祭だからね。お前も人型は書いたんだろう」

「うん、家で母さんが書いてくれたから、それに息をかけ、体をなでたよ。そのあとはどうなったか知らないけど」

「お母さんがちゃんと綾部に送ってくれてるさ。お前の人型も、今夜しっかりお祓いしてもらってるんだ。荷物を置いて一服したら、さっそくお参りにでかけるからな」

「わかりました」

午後六時すぎ、松太郎と大地は、節分大祭が行われる京都府綾部市にある大本本部の長生殿に入り、前列近くに座っていた。大地はここに来るのは、二度目であった。一度目は小学一年生の時だったので、はつきりとは覚えていなかったが、建物の大き

さに驚き、檜ひのきの香りがしたことは、記憶にあった。

午後七時、節分大祭が始まった。

大勢の祭員と瀬織津姫せおりつひめ。潔斎の舞を舞う舞姫。太鼓のリズムに合わせて奏上する神言かみこと。その中で人型を壺つぼにつめる人型行事。その壺を和知川まで運ぶ瀬織津姫行事。人型を和知川へ流す人型流し。そしてファイナールを飾る豆まき。

すべてが初めての体験だった。

「神々しい雰囲気というのは、こういうことなのか」

大地はそう思った。

母親の実家が大本信徒で、母も信徒であった。父親はあまり信仰に興味がないのか、信徒にはなっていないなかった。そのため母親の実家のように神さまをおまつりしてはいなかった。母親が信仰を強要しなかったため、大地もとりたてて神さまに関心はなかった。だが今、大地の心に感じるこの感情は、自分の意志とは無関係に自然とわき上がってくるものだった。

「ここに、神さまがおられる」

そう思えた。

松太郎とともに家に帰ったのは、夜も明けた午前六時すぎだった。辺りの景色が前日とは違い、心なしか輝いて見えた。

「不思議だなあー」と思った。

祖母・とものすすめで朝風呂に入り、朝食をとった。

「部屋に布団が敷いてあるから、しばらく横になりなさい」という祖母の言葉にあまえて、大地は布団に入った。心地よい疲れで、眠るまでに三分とかならなかった。

どれくらい時間がたったのか、窓から差し込める日差しに目が開いた。さわやかな目覚めであった。カーテンを開けると、立春の太陽が中天に上がっていた。

「こんな気持ちのいい寝起きは、久しぶりだなあ」

そう思いながら着替えをすませた。

リビングに行くと、松太郎が新聞を読んでいた。

「おじいちゃん、おはよう。じゃないか、もう昼だもんね」

「ゆっくり休めたか？」

「うん、とつても気持ちよかった」

「それは何よりだったなあ」

祖母が出してくれたお茶を飲みながら、大地は、昨夜のことを思い出していた。神さまにお参りすることが、あんなにも気持ちのよいものだったと気づいた半面、いくつもの疑問がわいていた。

「おじいちゃん、夕べの節分大祭のことで、わからないことがいくつもあるんだけど、聞いてもいい？」

「ああ、いいよ。わしに答えられることなら、何なりと言ってみるがいい」

「ありがとう」

と言いながら、ポケットから、長生殿で拾った豆を取り出した。

「あの、この豆まきの豆のことなんだけど、一般では拾ったあとにすぐ食べられる豆、つまりお菓子の豆や、火を通したものを使っていると思うんだけど、大本の豆まきの豆は、生の大豆だよ。それに、掛け声も普通と違うよね」

「鬼は内、福は内、とね」

「そう、福は内はわかるけど、鬼は内なんて、どうして一般と違うの？」

「そうだな。大地も大学生だから、ちょっと詳しく説明してみようかな。時間がかかるかもしれないが、いいか？」

「うん、いいよ。急いで帰ることもないし、しっかり聞かせてもらいます」

「よし、じゃあゆっくり説明しようかな」

松太郎は、穏やかに話し始めた。

「そもそも豆まきは、調伏行事といわれるものなんだ」

「調伏行事？」

「チヨウブクともジョウブクとも言うが、これは仏教用語で、一つには怨敵おんてきや魔障ましやうを降伏こうふくするという意味でな、まあ、悪魔退治だな。悪魔の目に向かって投げつけ、目つぶしをする、というのが豆まきなんだよ。それが日本の伝統行事となって受け継がれ、今日に伝わっているわけだ。それで、一般的には、『鬼は外、福は内』というんだ。そして、今ではその豆もすぐに食べられるように加工品を使っているんだ」

「でも、大本では『反対だね』」

「そう、なぜなら一般で言う『鬼は外、福は内』の鬼が、実は大本でおまつりしている神さまなんだよ」

「ええ、大本では鬼をまつっているの。それはマズイでしょう。でも、夕べはあんなに心地よかったのに、鬼や悪魔だとは思えないけどなあ」

「そう、大地の感性の方が正しいよ。豆まきの対象とされている鬼。その鬼こそが、

実は「まことの神さま」だったんだ」

「まことの神さま？ その神さまってどんな神さまなの？ それに、どうして神さまが鬼になってしまったのかな？ わからないなあ」

「まことの神さまというのは、いちばん最初の元の神さま、正真正銘本物の神さまと
いうことだ」

「つまり神さまの元祖ということ？」

「まあ、そうだな。大本では、この地球、われわれの住む大地、国を創造された神さま
ということだ、『国祖』と呼んでいる神さまだ」

「どうして神さまの元祖である国祖が鬼となってしまうたの？ あつ、わかった、何
か悪いことでもしてしまったのでしょうか」

「いやそうじゃない。たとえば、よくテレビドラマでも、本当は正しいことをしている
人が、悪人によって、悪者に仕立て上げられることがあるよね。そんな感じかな」

「でも最後は正義が認められて善が勝ち、悪が滅びる、なんていう日本人好みのスト
ーリーってとこですか？」

「そうなるはずだよ」

「おもしろそうだね。ねえ、おじいちゃん、国祖の神さまはどうして鬼にさせられて

しまったの？」

「その話をするには、今から五十六億七千万年以上前にさかのぼらなければならないんだが、つきあうかい？」

「もちろん、歴史好きの僕としては、ワクワクしてきたよ」

宇宙のはじまり

松太郎は、手にした湯呑みをテーブルに置き、ゆっくりと話し始めた。

「大地、この宇宙はいつごろできたか知っているか？」

「いろんな学説があるようだけど、今から百五十億年前のビッグバンから始まったということじゃなかったかな？」

「そうだなあ、一般的にはそう言われているな。でも大本では、今から約五十六億七千万年前に始まったと教えられている」

「教えられているって、誰に？」

「出口王仁三郎という人だ。大本では『聖師さま』と呼ばれている」

大地は襖が開けられたとなりの畳の部屋、ご神前の間に掲げられた写真に目をやった。

「あの人だね」

「そう、あの聖師さまが、『霊界物語』というご神書の中で書かれているんだ」

大地はもう一度ご神前の間に目を向けた。

「本棚の中にズラッと並んだ本だね。あの中にそんなことも書いてあるのかあ」

うなずきながら、松太郎の顔に視線を戻した。

「聖師さまは、宇宙創造の始まりについて、『大虚空中だいこくうちゆうに一点の、忽然ほちと顕れ給うあわむ』
と言われている。大虚空中だいこくうちゆうというのは、まったく何も無い状態のことで、とほちというのは、
点のようなことだろうが、そうとしか表現できない存在で、今の私たちには想像でき
ないものようだね」

「確かに、何もない状態というのは想像できないけどね」

「その、ほちが、次第に変化して円形のようになって、スのスのコトタマが生まれ出たんだ」

「スのスのコトタマ？」

「一般では言霊と書いて、コトタマと言われることが多いが、大本ではコトタマと言
っているなあ」

「そうなんだ。それでスの言霊って音なの？」

「音とも何とも例えられなくて、これも想像できないものなんだろうなあ。何でもこ
の世でいちばん近いのは、生まれたばかりの赤ん坊の寝息だそうだ。大地も結婚して
子供を授かったら、寝ている赤ん坊の口元に耳を近づけて試してみるがいい。とても
気持ちのいいものだよ」

「ふう〜ん」

「この◎の言霊こそが、神さまの『元祖の元祖』ということだよ」

「ということとは、国祖ということだね」

「そうなんだけど、そうじゃないんだなあ、これが」

「え、どうということ」

「国祖という呼び名になるのは、もっとなんと後になってからで、この地球が出来てからになるんだよ」

「ああ、昔の武士のように、年齢とともに名前が変わるようなものだね」

「そうそう、そういうことだ」

松太郎は、話をもとに戻した。

「◎の言霊は、まだ霊でもなく、宇宙のすべてのものの『大根元』であり、ちょっとむずかしく言うると、太極元たいきょくげんということだ」

「太極元？ 確か太極たいきょくというのは、中国の易学えきがくから出ていて、朱子学の宇宙論の中で重視された概念だよな。万物の元始、宇宙の本体、万物生成の根元、という考え方だね」

「さすが大地、よう知つとるね」

大地は、一応大学生ですからと言わんばかりに、得意そうな顔をしながら、

「で、その○の言霊はどうなったの？」と聞き返した。

松太郎は、○の言霊にも呼び名（ご神名）があることを大地に伝えた。

天之峯火夫神である。

天之峯火夫神は、その後十億年経過する間に、現在の宇宙とはちがう、霊的な世界（天の世）でのご活動を続けられることになる。

松太郎は、『霊界物語（天祥地瑞）』で示されている“天の世”の状況を話そうかと思ったが、一度に説明すると大地が混乱するかもしれないと思い、あえて話さず、話を十億年すすめた。

「天之峯火夫神とよばれた○の言霊が、湯気とも煙とも何ともたえようのない異様で微妙なものとなって大虚空中に漂っていたんだ。そしてこれが十億年たつて広がり、形も音も色もない霊物となったんだ」

「えー、十億年でそれだけ？ 気の長い話だね。その霊物というのは、結局得体の知れない物ということじゃない」

「まあ、そうとしか表現できないんだなあ」

「なかなか理解しづらいね」

大地は、学校で習うこととはまったく別物だと思った。

「大地やいいかい、人間はとかく自分を標準として物事を推し量りたがる生き物だ。だから神さまというと、すぐに人格化して想像してしまふ。そして自分と比べてあまりに大きな太陽や月、地球や星などは命のないもののように考えたがるんだ。でも、この考え方そのものが、本当は幼稚なことなんだよ。神さまのことを知ろうと思えば、まず謙虚にならないといけない。大地、出来るかな？」

大地は、少し納得いかない顔をしながらも「わかったよ」と答えた。

「で、おじいちゃん、十億年たってどうなったの？」

松太郎は、お茶で喉のどをうるおし、話を続けた。

「十億年たって現れた霊物を宇宙の大元霊だいげんれいといい、日本では古事記の中に、天あめの御中主神みなかぬしのかみ”として登場している神さまだ」

「日本では、ということとは、外国では違う名前と呼ばれているということ？」

「仏典では阿弥陀如来、キリスト教ではゴッドやゼウス、易学では太極、中国では天主や天帝。まあ、呼び名はいろいろあるけれど、つまりは、造物主や創造者ということだな」

「ということとは、世界の主立った宗教がそれぞれ一番だと思つてあがめている神や仏などは、皆同じだということだね」

「そう、根元は同じということ。だから大本では、『万教同根』という教えがあるんだ」
「万教同根かー、いい言葉だね」

以前にも松太郎から聴いていた言葉であつたが、大地はその意味が少し理解できた気がした。

「さて、細かく説明しているとなかなか進まないの、ちよつとスピードアップしようかな」

「そうだね、まだ鬼の話にまでいってないものね」
大地もお茶をすすった。

「天之御中主神からさらに二十億年、つまり一点の^{ほち}から三十億年経つまでの間に、天之御中主神から霊と体が生まれたんだ。体と言つても、私たちのような体ではないけどね」

「ちよつと待つてよ。じゃあそれまでの神さまは、霊でもなかったということ？」
「そうだな、だから太極元とか霊物という言葉で表現されているんだろうなあ」

大地は首をかしげながら、「素直に、素直に」とつぶやいた。

松太郎は、神さまと人間の知恵や力の差を、もう一度大地に納得させるため、聖師さまのお示しを伝えた。

「洪大無限の神の力に比べては、虱しひかみの眉毛まゆげに巣すくう虫、その虫のまた眉毛に巣くう虫、そのまた虫の眉毛に巣くう虫の放った糞くそに生わいた虫が、またその放った糞に生いた虫の、またその虫の放った糞に生いた虫の糞の中の虫よりも、小さいものである」

（『靈界物語』第五卷・総説）

「アハハ、なるほど。虱に眉毛があるかどうかはさておいて、おもしろい例えだね」と、大地は笑いながらうなずいた。

「その霊と体のことだが、霊系の祖神、ん〜、つまり、霊の元祖を「高皇産靈神たかみむすびのかみ」といい、体系の元祖を「神皇産靈神かむむすびのかみ」というんだ」

「高皇産靈神、神皇産靈神という名前はどこかで聞いたことがあるような気がするなあ」

「神さまを数える単位は「柱はしら」だから、これから柱という言葉をつかうよ。で、この

二柱ふたしらの神さまは、天之御中主神の分身というようなことでなく、働きとしてそう呼ばれているんだ。だから、天之御中主神とともに、三柱みしらで一体さんみいつたいということ、三柱みしらで一体さんみいつたいといわれるんだ。古事記では、造化ぞうかの三神と書かれている。でも、あくまで独ひとり神ということなんだ。ちよつと難しいかな？」

「ん、完全には理解できないけど、ここで引つかかっているのは先に進めないから…。おじいちゃん、その先を教えてください」

「よしよし」と、松太郎は、うなずきながら話を続けた。

「一点の、ほちから三十億年たつて、霊・力・体がやや完全となった、と示されている」

「おつと今度は、力が加わつたなあ。おじいちゃん、その霊・力・体って何か、〃虱の糞虫〃にもわかるように教えてもらえませんか？」と、笑いながらたずねた。

松太郎は、腕を組んでしばらく考え、ポケットから携帯電話を取り出して、テーブルの上に置いた。

「これだよ」

「えっ、ケイタイ？」

大元靈^{もつみたま}の靈、力、体

松太郎は、テーブルに置いた携帯電話を再び手にとり、説明を始めた。

「このケイタイの端末自体は、いろんな部品から出来ているだろ」

「そうだね、たくさんのパーツから組み立てられているよね」

「そう。たくさんの部品が集まってこの形が成り立っている。つまり“体”をなしているんだ。今は、ケイタイ自体で写真が撮れたり、電卓になったり、辞書にもなる。便利なもんだなあ」

「ホント、便利だね」

「でも、ケイタイは本来、何が目的で作られたのかなあ？」

「そりゃあもちろん、電話をするためでしょう」

「そうだなあ」

「もつとも今は、メールも大切な機能だけだね」

「そうらしいなあ。ところで大地、電話もメールもこの端末だけでできるのかな？」

大地は首をかしげながら答えた。

「おじいちゃんのケイタイは、ご年配用の簡単携帯のようだけど、それでも出来るん

じゃない？」

「いやいや、そういう意味じゃなくて、ほかに必要なものはないか、ということだよ」
大地は、松太郎が何のことを言っているのか一瞬わからず、キョトンとしていたが、すぐに気づき、返答した。

「あ、電波ね。でも、おじいちゃん、電波があつてこそそのケータイだから、それは当たり前のことだよ」

「そうか、当たり前かなあ？　でも、山間部の谷間なんか場所によっては、通じないところもあるんじゃないか？」

「まあ、確かにビルの中なんかでも、圏外になるところもあるよね。トンネルの中で、電話が切れることもあるしね」

「そうだなあ、だからケータイは、目に見えない電波があつてこそ、はじめてその用をなす、つまり“力”を発揮するんだよ」

大地は、小さく二回うなずいた。

「なるほど、そうすると目に見えない電波が“霊”で、ケータイ自体が“体”、そして、電話やメールが出来ることが“力”、ということだね」

「そうだ。そのどれ一つ欠けてもダメで、三つそろってはじめて携帯電話としての役

割を果たすことが出来るわけだ。同じように、この世の中では、霊・体・力、その三つがそろふことが大切なんだよ」

大地は、「ん、なるほど」と、うなずいた。

大地の表情を見て、松太郎はもう少し、霊・力・体のことを伝えようと話を続けた。そして、ご神前から『おほもとのりと』を持って来るように大地に頼んだ。大地は、「はい」と答えて、ご神前の案に置かれた『おほもとのりと』を持ってリビングに戻ってきた。

「これだよね」

「そう。大地、その中の『感謝祈願詞』というところを開いてみなさい」

大地は、『おほもとのりと』をめくった。

「あ、あつた、これだね」

「その『感謝祈願詞』は、感謝と祈願の詞と書いて、『みやびのことば』と読ませているなあ」

「そうだね」

「文字通り、その『のりと』は、神さまに対する感謝の節と祈願の節が、みやび、つまり美しい詞でつづられているんだよ」

「そうなんだ。ところでおじいちゃん、これは昔からある『のりと』なの？」

「実は、明治四十一年ごろ、聖師さまが発表された大本独特の『のりと』でなあ、元文は今の倍くらい長さなんだよ」

「え、これでも十分長いと思つたのに、まだ倍もあつたの？」

松太郎は、ご神前の間のご神書が並べられた本棚に目をやった。

「元文の『感謝祈願詞』は、あの『霊界物語』第六十巻の第十六章に書いてあるんだが、最初の祈願の節がもつと長いんだよ」

「へえ、またあとで見よう」

「まあ、それはいいとして、この『感謝祈願詞』は現在、本部でも各家庭でも朝拝の時に奏上することになっている。それから本部や各機関では、大祭の時に奏上してるんだ」

「そういえば、夕べの節分大祭の時にも奏上したね」

「そうだったな。大地、『感謝祈願詞』の最初の二行を読んでごらん」

大地は、手にした『おほもとのりと』に目をむけ、言葉を確かめるように、ゆつくりと声を出して読みはじめた。

「至大^{たかあま}天^{あま}球^{はら}の司^{つかさ}宰^さにましまして、一^ひ靈^と四^し魂^{たま}、八^{ふた}力^{ちから}、三^み元^{もと}、世^よ、出^{いっ}、燃^{むゆ}、地^な成^{なり}、弥^や、凝^{ここの}、

足^{たり}、諸^も、血^ち、夜出^{よろづ}の大元^{もとつみたま}霊^{たま}」

大地が読み終わると、松太郎は少し間を置いて言った。

「実は、この二行は、宇宙の成り立ちを示してあるんだよ。そして、二行の最後が『大元^{もとつみたま}霊^{たま}』とあるだろう」

「あ、ホントだ。『もとつみたま』とルビがふつてあるけど、『大元^{もとつみたま}霊^{たま}』だね。確か、一点の^{ほち}から十億年たって現れた霊物を宇宙の『大元^{もとつみたま}霊^{たま}』といって、それは^{あめのみなかぬしのおおかみ}天之御中主大神^{あまの}”のことだったよね」

「その通り。そして、ひと、ふた、み、よ…というのは、^{あま}天の数^{かずうた}歌^{うた}”というんだが、それが宇宙の成り立ちを示し、聖師さまはそれに漢字を当てておられる。その最初の、『ひと、ふた、み』に『一霊四魂、八力、三元』と漢字を当ててあるが、それが『霊、力、体』のことなんだよ」

「ふうくん、なんだか深く説明してもらうと、すごく時間がかかりそうだね」

「まあな。でもちよつとだけ解説しようかな」

「はい、お願いします」

大地は身を乗り出した。

松太郎は、『感謝祈願詞』の最初の部分を指差し、言葉を継いだ。

「大元霊の霊が “一霊四魂” ということなんだが、その一と四の数字をとるとどうなる？」

「あ、霊魂になるね」

「そうだな。だから逆にいうと、霊魂というのは、“一霊四魂”を略した言い方ということにもなるんだ。本来、霊魂には直霊という一霊に、荒魂あらみたま、和魂にぎみたま、幸魂さちみたま、奇魂くしみたまという四つの魂の働きがあるということになる。そして、それぞれに特徴があるんだ」

「複雑なんだね」

「神さまの霊だけが、“一霊四魂”じゃなくて、実は神さまご自身の“一霊四魂”を、われわれ人間にも分け与えておられる。だから、大本では、人は神の分霊であり、神の子、神の宮といい、とても有り難い存在だと教えられているんだ」

「なるほど。それじゃあ、次の“八力”も、力が八つあるということなの」

「そう、よく察しがついたな。実は“八力”の“ふ”は進み行くとか、沸騰ふつとするという意味があつて、“た”は対象力という意味があるんだ。だから対照的な二つの力がペアで四組あつて、合わせて八つあるということだ」

「へえ、おもしろいねえ」

「動と静、動く力と静まる力。」

解と凝、解く力と凝り固まる力。

引と弛、引く力と弛む力。

合と分、合わさる力と分かれる力。

この対照的な四組の力が八力と言われ、大元霊の力ということになるんだ」
「確かに理にかなった組み合わせだね」

松太郎は続けて「体」を説明した。

「そして、『三三』。みは果実の『実』とか、わが身の『身』、つまり体という意味で、その状態によって三つに分けられるんだ」

「今度は三つですか？」

「そう、剛・柔・流という三つだ」

「剛、柔、流？」

「物体はその状態、様子で大きく三つに分けられるんだ。」

剛というのが固まった状態で剛体。

柔というのがやわらかい状態で柔体。

そして、流というのが、液状の流体ということになる。流れる水も、温度によって

シャーベット状のやわらかい状態になったり、氷に固まることもあるだろ」

「そうだね」

「この地球上の物体も、剛・柔・流の三様に分けられるんだ。剛は鉱物の本質、柔は植物の本質、流は動物の本質と示されているだよ」

「へえ、そうなのか」

「この大元霊の『霊、力、体』は、今の世の中でもすべて当てはまることで、普遍的な真理なんだよ」

「なんだかすごいね」

「さつき、“一霊四魂”が神さまから分け与えられていると言ったが、実は八力の“力”と三元の“体”も、みな、神さまから分け与えられているんだ。だから、私たちが頂いているのを、分霊、分力、分体と言い、神さまの霊力体を、本霊、本力、本体とも言うんだ」

「そのことも『感謝祈願詞』（みやびのことば）に書いてあるの？」

「書いてあるとも。その六行目の『各自（おのおの）至粹（よ）至醇（き）之魂（み）力体（ま）を賦与（さづ）たまひ』というのがそうだよ。この一節は、『各自に本当に醇（純）粹な魂（霊）力体を授けられている』という意味だからね」

「そうか！ この今の世界も、僕たちにも、大元靈もろつみたまの『靈、力、体』の働きがずっと続いているということなんだね。なんだか壮大なロマンだなあ〜」

大地は松太郎の説明を感じ心しながら聞いていた。

「で、おじいちゃん、一点のほちから三十億年たった後はどうなったの」
「それからなあ……」

松太郎が話を続けようとした時、台所の方から、大地の祖母・ともの声がした。

「そろそろお昼にしますよ」

「お、そんな時間か？ すっかり話に夢中になってしまっていたなあ」

「おじいさん、その前に、畑から大根を採ってきてもらえませんか？」、とものが言った。

「よし、わかった」

席を立とうとした松太郎に大地が声をかけた。

「おじいちゃん、ぼくも手伝うよ」

「そうか、じゃあいっしょに行くか」

勝手口から外に出た二人は、裏の畑へ向かった。少し肌寒かったが、立春のおだやかな日差しがあたりに降り注いでいた。

「気持ちいいねえ」

大地は両手を広げ、大きく深呼吸した。

天と地のはじめ

家庭菜園とはいえ、松太郎の畑は手が行き届いている。多くの冬野菜は収穫が終わっているが、まだ大根や水菜、遅蒔まきのホウレンソウなどが育っている。晩秋に定植されたイチゴやエンドウの苗が、立春の日差しを浴びて輝いていた。

畑に出た松太郎は、

「大地や、その足もとの大根を二本抜いてくれないか」と言った。

大地は、「はい」と答えて、青く広がった葉を束ね根元を持ち、力を入れて引き抜いた。

「うわゝ、立派な大根だね。おいしそう」

大地は続けてもう一本抜き、大根についた土を手で払い落とした。

松太郎はその様子を見ながら何か考え事をしていた様子で、しばらくして思い立ってように言った。

「大地、おまえの後ろにコップがあるだろう」

大地は後ろを振り返った。畑作業の時にでも使ったのだろうか、少し土で汚れたガラスコップが目に入った。

「あ、これ？」

「そう、そのコップには、雨水がたまっているが、その中に土を一つかみ入れてかき混ぜてごらん」

「え、どうして？」

「まあいいから、やってごらん」

「うん、わかったよ」

大地は、不思議な面持ちで大根を足もとに置き、一握りの畑の土をコップに入れ、そばにあった棒切れでかき混ぜた。

「これでいいの」

「ん、それでいい」

松太郎は、納得したような表情で、

「大地、これが一点の^{ホチ}から三十億年たった状態だよ」と言った。

「え？ あ、おじいちゃん、宇宙の話にもどるんだね」

大地は笑顔で答えた。

「さっきの話で、今、三十億年まで来たなあ」

「はー」

「その時は、霊・力・体がやや完全となるわけだが、まだ宇宙は天と地に分かれていない状態で、宇宙全体は混沌こんとんとしている」、と示されている。それを分かりやすい例えで言うと、今、大地が持っているガラスコップの中のような状態なんだよ」

「泥水をしっかりとかき混ぜたような状態ということだね」

「そのコップの中が宇宙全体だとしたら、見たように、どこがどこだかわからない、まだ天もなく、地もない状況ということになるんだ」

「それで、いつ天地が出来たの？」

「さらに十億年、つまり一点の、ほちから四十億年の歳月が流れてからと示されている」

「また十億年待つの」

と、大地は驚いた声で言った。

松太郎は言葉を継いだ。

「大地、コップを下に置いてごらん」

「はい」

「コップの泥水を地面に置いて、じっと待っていると、いずれ水と泥に分かれるだろ」

「そうだね。重い土は下に沈み、軽い水が表面に上がり、水と土の層がはっきり分かれるね」

「その水と土に分かれるまで十億年必要だったんだ。これはあくまで例えだが、水の部分が天、土の部分が地というふうに理解してもらったらいいんだ」

「なるほど。でも本当に、気の長い話だね」と、大地は感心した面持ちだった。

「そのあと、この地球や太陽、月や多くの星が出来るんだが、それを創るために、竜が現れるんだ」

「竜？ ドラゴンのこと？ へえ、竜が地球を創ったの？」

「最初は、泥の塊のようなものの真ん中に鮮やかな金色をした丸い柱が現れる。それが傾きながら、泥を巻き込み、目にも止まらない速さで回転し出したんだ。するとどうなる？」と松太郎は大地に質問した。

「えっ、そうだねえ。たとえば、コップの中で沈殿した泥をジューサーに入れてかき混ぜたようなものかなあ？」

「おう、そうだなあ、そんなとこかな。それじゃあ、かき混ぜている最中に、そのジューサーの蓋をとったらどうなるかな？」

「そりゃあ、泥が四方へ飛び散ってしまうよ」

「ん、そうだなあ。聖師さまは、その飛び散った小さい泥の塊が宇宙に広がり、無数の星となったとおっしゃっているんだ」

「へえ。で、地球は？」

「まあジューサーの中に残った中心になる泥の塊ってとこかな。その後、金色の円柱が竜体が変わって塊の上を東西南北に馳せめぐるんだ。それと同時に、金の竜から大小のたくさんの竜体が生まれて、地上を泳ぎ回ったんだ」

「竜の子供ですか？」

「まあ人間の想像を超えた世界で、イメージするしかないけど、その竜たちが通ったところが、大小の山脈になった。そして、低いところに水が集まり、そこが海となった、ということだ」

「そうやって、山や海が出来たわけですか？」

「そう。そして、今度は海の真ん中と思われるところに、とても高い銀色の柱が出てきた。この柱は右廻りに回転して、そこからいろんな種が飛び散ったんだ」

「今度は銀の柱ですか？ まさかそれが銀の竜になったとか言うんじゃないよね」

「そのまさかだ」

「やっぱり！」

「銀の竜は海の上を西から東へと泳いで進み出して、金の竜は東から泳いで来て……」

「戦った？」

「いやいや、そうじゃない。顔を向き合わせて、何か相談されていた様子だったということだ。その後、金の竜体は左へ、銀の竜体は右へ旋回し始め、そのために地上は恐ろしい音響を発して振動したということだ」

「それから」

「この時に、金の竜体の口から、大きな赤い玉が凄まじい音とともに飛び出して天へ上って太陽となった。そして銀の竜体の口からは白い玉が天へ上って月となったんだ」「え、意外。じゃあ、地球から太陽と月が出来た、ということなの」

「というより、竜体であった神さまが創られたということになるだろうなあ」

「その金と銀の竜体は、神さまだったのか？ で、何という神さまなの？」

「二柱の神さまは夫婦神で、金の竜体がおおくにとこたちのみこと大国常立命、銀の竜体がとよぐもめのみこと豊雲野命と申し上げるんだ」

「大国常立命と豊雲野命かあ……」

松太郎は話を続けた。

「こうして、一点の、ほちから四十億年の歳月が流れて天地がわかれたわけだが、そのことを「ぼろはん天地剖判」と言うんだ」

「天地剖判……、重厚な響きがあるね」

「さつき銀色の柱の右回転の時に、そこからいろんな種が飛び散ったと言ったが、その種から、いろいろな樹木が芽を出し始めた。その中で最初に生えたのが松なんだよ。だから、大本では、ご神前や玉串に松を使うんだ」

「そうだったのか」

「そして、神さまはこの後も長い歳月をかけ、いろいろなプロセスを経て、今の地球の地理に近い状態を創っていかれたんだ」

「世界の大陸が出来たということだね」

「今の五大州に近い状態になったんだろうなあ。そしてその中でも日本は、天地剖判の時の金の竜体と同じ形、同じ大きさをしているということなんだ」

「そういうことから、日本は神国と言えるんだね」

「そうして、大宇宙が完成するまでに、なんと一点の^{ほち}から五十六億年の歳月が流れているんだ」

「うわー、想像もつかない長い時間だね。…アッ！ おじいちゃん、畑に出てから、ぼくも長い時間がたったんじゃない？」

「おっ、いかんいかん。あまり話し込んでると、おばあさんから催促が来そうだからな」

「そうだね」

大地は笑いながら、泥水を畑の土に返し、コップを元あった場所に戻した。収穫した大根を両手に持ち、松太郎の後について台所に向かった。

大地は、勝手口横の水道でいいねいに大根を洗い、台所に入った。

「はい、おばあちゃん」と大根を手渡した。

「ありがとう。さあ、お昼の用意が出来ているからね」

「はい、お腹なか空いたなあ」

「おじいさんの話につきあうのもたいへんだろう？」

「あ、いや、そんなことないよ。とっても勉強になるし、楽しいよ」

「そうかい、それならいいんだけどね。おじいさんは、神さまの話になると、止まらなくなるからね」

二人は笑いながら言葉を交わした。

「おじいちゃん、お待ちせ」

大地は松太郎と向かい合わせに食卓に着いた。

三体の神

食卓には、湯気を立てているご飯と、ともの手作りの煮物、春菊のおひたし、それに、焼き魚が並んでいた。魚は綾部近くの舞鶴で水揚げされたものだろうか、身が厚くふつくらしている。大地の郷里・長野には海がないためか、実家で見るとは鮮度が違うような気がした。

「おいしそうなサバだなあ。いただきま〜す」

箸をとろうとした大地に向かい松太郎は、「ちょっと待ってくれ」と言つて手を止めさせた。

「うちでは食事の前に、『三首のお歌』というのを唱えるんだ」

「あつ、そうだったね。以前来た時もそう教わったんだ。ごめん。この短歌だね」

大地は、食卓の横の壁に貼つてある小さな色紙に目を向けた。

天の恩土のめぐみに生れたる

菜乃葉一枚むだに捨てまじ

一つぶの米のなかにも三体の

神みますことを夢な忘れそ

火のご恩水のおめぐみ土の恩

これが天地の神のみすがた

「これは、私たちが、二代さま」と親しみを呼んで呼んでいる大本の二代目の教主・出口すみこさまが詠まれたお歌なんだよ。さあ、手を合わせて」

二人は、そろって三首のお歌を拝誦はいじゆした。

「今度こそ、いただきます」

「たくさん食べなさいよ」

時計は午後一時を回っていた。遅めの昼食になり、箸が進んだ。大地は春菊のおひたしを口に運んだ。

「ん、おいしい！ それに甘いなあ」

「そうだろ。うちの畑で作ったものだからな。農薬は使わず、有機肥料で育てているから、安全・安心で、野菜本来の味を楽しめるんだよ」

「春菊って、少し苦みがあるのが普通だと思っていたけど、違うんだね。これだけ甘

いと、野菜嫌いの子供でも春菊が好きになるね」

「これが春菊の本当の味だよ。化学肥料を使っていると、本来の味が損なわれてしま
うんだらうね」

「そうか、やっぱり本物は違うね」

食事をしながら、食材の話題で会話がはずんだ。しばらくして、大地が思い出した
ように、「三首のお歌」の色紙を見ながら、松太郎に問いかけた。

「ところでおじいちゃん、この三首のお歌の二首目の中にある、「三体の神」って、ど
んな神さまなの？」

この質問が、松太郎の神さま談義に火をつけてしまった。

「大地、いい質問だ！」

大地は、松太郎の得意な表情を見てとり、すぐさま言葉を継いだ。

「アツ、おじいちゃん。その答えは、食事の後に聴くよ。そうしないと、いつまでも、
おじいちゃんの昼食が終わらなくなってしまいうからね」

松太郎は、機先を制しられた思いになりながらも、

「アハハ、そうだなあ。じゃあそうしよか」と言った。

「大地はかしこいね、それがいいよ」

ともがそう言いながら、湯呑みを食卓に置いた。

食事が終わり、二人は手を合わせて、「ごちそうさまでした」と感謝の言葉を言った。台所の方から「どういたしまして」と、とも声が聞こえた。

二人は、食卓から離れ、リビングのソファに戻った。

「お待たせいたしました。おじいちゃん、さっきの話の続きをお願いします」

「よしよし、わかった」

松太郎は笑みを浮かべながら、ゆつくりと話を始めた。

「さっき食べた春菊のことだけど、私が裏の畑で作ったと言ったが、正確に言うところじゃないんだよ」

「え、おじいちゃんが作ったんじゃないの？ ああ、わかった。実はおばあちゃんが作ったんだ」

「いやいや、そういうことじゃなくて、あの春菊は実際に私が種を蒔き、水や肥料をやってお世話したものだよ。でも人間は、春菊の種を、何も無いところから作ることはできないだろ」

「それはそうだね」

「それに人間は、水ひとつとっても、無の状態からは作ることはできない。だから正確に言うと、人間は、野菜の成長のお世話をするだけなんだよ」

「なるほどそういう意味ですか。では、おじいちゃんが育てたということだね」

「んー、そうとも言えるし、そうとも言えないなあ」

「また、その答えか」

「野菜を育てるために、大切なものが三つあるんだが、わかるかな？」

「三つ？ それはナニ？」

大地は聞き返した。

「太陽の熱と光。水。それにお前の名前と同じ大地の土だよ」

「太陽と水と土の三つか。だから二代さまは、火と水と土の恩が、天地の神さまのお姿だとおっしゃっているんだね」

「そのとおりだ。だからこのお歌の『三体の神』というのは、『日の大神さま、月の大神さま、大地の大神さま』のことを指しているんだよ」

大地は少し首を横に傾けながら、

「太陽が日の大神さまで、土が大地の大神さまということだよ。ということは、水

が月の大神ということになるけど、これはどういうことなの？」と聞き返した。

「おまえも知っていると思うが、海の潮の満ち引きは、月の満ち欠けに作用されているだろう」

「はい、それは聞いたことがあるよ」

「この地球上の水に関しては、月の力が大きく作用していると教えられているんだ。潮の干満もしかり、草木につく朝露もしかりだ。私たち人間を含め、この地球上のすべての生物は、月の恩恵なしには生きてゆけないんだよ」

「太陽の力は偉大だと思っていたけど、月の力も大切なんだね」

「だから、人間は、日、水、土という大自然の恵みに対して、常に感謝の気持ちを持たないといけない」

「そうか、それを忘れないためにも、三首のお歌を食事の前に唱えるんだね」

「そういうことだなあ」

「おじいちゃん、ぼくもこれから出来るだけ食事の時には、三首の歌を拝誦するようにします」

「いい心掛けだ。忘れるなよ」

「はい」

と大地は答え、話題を神の歴史にもどした。

「ところでおじいちゃん。天地剖判のあと、大宇宙が完成したところまで話が進んでいたけど、それからどうなったの？」

「そうだったなあ。一点の、ほちから五十六億年の歳月が流れ、大宇宙が完成したところまでだったなあ」

「はい」

「天地がわかれ、地上が造られてしまうと、おおくにじこちたちのみこと 大國常立命さまととくもぬのみこと 豊雲野命さまは、もう竜体である必要がなくなられた。それで、人間の姿に変化されたんだ」

「ええ、人間に変身？」

「いや、今の私たちのような人間の姿ではないんだ。聖師さまは、霊体の人間の姿」とおっしゃっているけど、どんな大きさでどんな姿なのかはわからないなあ。でも、人間に近いお姿だろうと、想像するしかないね」

「そうなのか？」

「大宇宙の元祖の元祖である大國常立命さまは、地球や太陽、月や星を造られたけど、今度はそれらを守り育てていかなければならないわけだね」

「造りっぱなしではないということだね」

ここで松太郎は、『宇宙の本源は活動力にして即ち神なり』すなわという言葉を大地に伝えた。

「これまでの話で、この大宇宙が存在し、地球をはじめさまざまな天体や惑星などが動いていること、それ自体の働き、活動力そのものが神さまである、ということ
は理解してもらえるかな？」

大地はうなずいた。

「はい、何となく。でも人間心で考えると、大宇宙を一人、いや一柱で守り育ててい
かれるのは、たいへんなことだよね」

「そう。だから、神さまはそれぞれに担当を決めていかれるんだ」

「役割分担ですね」

「大国常立命さまが竜体の時、そこからたくさんの竜体が生まれたと言ったけど、そ
の竜体の神々がそれぞれ人間の姿に変身されたんだ。大国常立命さまが親だとすると、
そのたくさんの神さまは、お子さんに当たることになる」

「じゃあ、その子供たちがそれぞれ決められたところを担当されるということだね」

「そういうことだ。ここで、大切なことがあるんだ。親である大国常立命さまは、

国常立尊（別名・国治立命）と名前を変えられて、地球をお守りする担当になられたんだ。この時、「国の祖」ということから、「国祖」と呼ばれるようになったんだ」

「それは、ご神名？」

「ご神名というより、人間社会に置き換えると役職や肩書きみたいなものかな。だから、国祖・国常立尊というんだ」

「なるほど。あつ、でも待つてよ。地球ということは地でしょ。元祖の元祖」なら、より高い天の方を担当されたらよかつたのにな」

松太郎は目を輝かせ、膝をたたいた。

「大地、いいところに気づいた！ そのことをはじめ、実は、ここからがおもしろい歴史になるんだよ」

「えっ、ナニナニ？」

大地は身を乗り出した。

国祖ご退隱と天地の神

松太郎は、一つ咳せき払いをし、話を始めた。

「例え話だがなあ、大地が何か起業したとしよう」

「あゝ、でも現実問題、まだ就職も決まってないんだけどね」と、大地は笑いながら言った。

「まあまあ、あくまでも例え話だよ」と松太郎は苦笑いしながら話を続けた。

松太郎は、「どんな仕事にしようかなあ」と、腕組みをして考えていたが、少し間をおいて、

「そうだ学習塾にしよう」と言った。

「えっ、学習塾？」

「大地はすでに結婚していて、仲のいい夫婦二人で協力しながら塾を開いたとしよう。最初は、近所の子供たち数人に教えていた。勉強の教え方もさることながら、挨拶あいさつや礼儀など生活態度の指導もしていて、とても評判になった。そのうち口コミで塾に入る生徒も増えてきた。そこで、看板も掲げて本格的に塾の運営をすることになった。塾の名前は『大地塾』だ」

「なるほど、大地塾か！」

「最初は大地一人が先生となり教えていたが、生徒が増えてきて、とても手がまわらなくなつた。そこで、優秀な先生を連れて来て、クラスも増やすことにした。これがまた評判となつて、入塾する生徒がどんどん増えてきた。生徒が多くなるにつれて、クラスも増やし先生も増員していった。生徒の年齢も幅が広くなり、とても塾の形態ではおさまらなくなつてきた」

「大発展だね」

「そこで大地は、塾を学校法人にしたんだ」

「おお、今度は学校ですか」

「学校となると大きな建物や設備も必要になり、敷地を求め校舎も建てた。ますます生徒も増えた。大地はこの学校の校長先生になつたんだ」

「校長ですか。で、学校の名前は『大地小学校』というところでしょうか？」

「まあ、そうするか。学校法人・天地会『大地小学校』というところかな」

「いいねえ」

「開校と同時に、入学希望者も殺到し、立派な小学校になつた」

「ところでおじいちゃん、僕の奥さんはどうなったの？」

「あ、忘れてた。奥さんは、教頭先生になってもらおうかな」

「了解です」

「さて、順調なスタートを切った学校だったが、規模が大きくなると、生徒をまとめていくのが難しくなるなあ」

「そうだね、人が増えると束ねるのは大変だよね」

「そこで、校長はしっかりした『校則』を考えて発表したんだ。まじめで一本気、厳格な性格の大地校長は、校則を厳守し、先生や生徒を指導していったんだ。だから、大地小学校は学習面・生活面とも、とても優秀な生徒が育ち、優良小学校になっていくんだ。そしていくつかの分校も出来たんだ」

「さすが大地校長。僕と性格が違うけど」と、大地が笑った。

「年月が流れ、大地には四人の子供も授かった」

「うわー、子沢山だね」

「その子供たちも立派に育ち、やがてこの学校の先生になった」

「家族経営みたいになったんだね」

「現実的には今の私立学校法では、親族での経営はできないけど、あくまでも例え話

だからね」

「はい、わかっていますよ」

「さて大地校長だが、本来ならこの学校法人のトップである理事長くらいに就任して、大所高所から学校経営に携わった方がいいんだけど、そこは根っからの職人気質で、あくまで現場にこだわり、校長職にとどまったんだ」

「教育熱心ということだね」

「そうだな。それで自分の代わりに、子供の中で一番優秀な長男に、理事長職を託したんだ。この長男も立派な人格者で、学校法人・天地会の学校は、どこもうまく運営されていたんだ」

「メデタシ、メデタシだね」

「ところがだ」と、松太郎は話を展開した。

「好事魔多し、ということがあるが、そんな立派な学校も、年月を重ねていくうちに、だんだんとほころびが見え出してきたんだ」

大地はしばらく考えて、

「たぶん、生徒の中にやんちゃな子が増えてきたんじゃないの」と言った。

「そうなんだ。大地校長が決めた校則に従わない生徒が出てきたんだ。この学校の校則は厳し過ぎる」とね」

「さもありませんだね」

「こういうことは伝染するもので、校則や校長に反発する生徒が増えてくる。そればかりか、担任の先生の中にも、反校長派が出てきだすんだよ」

「え、それはマズイよね」

「しかも、保護者の中にも、自分の子供かわいさに、学校に苦情を持ち込む親まで現れてきた」

「今流行の『モンスターペアレンツ』だね」

「そう、保護者を後ろ盾にして、先生たちも校長に対して、厳しい校則を緩和して、もっと自由で気楽な学校にしてくださいよ、って進言するようになったんだ」

「で、大地校長はどうしたの？」

「もちろん、頑固一徹な校長は、そんな苦情に屈することはなかったんだ」

「さすが！でも、何だか思わしくない状況になりそうだね」

松太郎は目を閉じて数回うなずき、言葉を継いだ。

「多勢に無勢どころか、一対大勢だから厳しい状況に追い込まれたが、生徒や先生、保護者からの進言に対して、大地校長はあくまで正論を貫き、一切聞く耳を持たなかつたんだ」

「ガンコだね」

「そこで先生らは考えた。『そうだ、仲のいい奥さんである教頭先生から助言してもらえば、さすがのガンコ校長も聞いてくれるんじゃないか』とね」

大地は「なるほど」という表情で頷いた。

「だが、ムダだった。いくら愛妻の言葉でも、そこは譲れなかった」

「ダメかあ」

「そこで、先生たちは最終結論を突きつけたんだ」

「最終結論？」

「『大地校長、引退してください』と」

「辞任を迫ったということだね。でも校長は聞かないよね」

「そう、一切とりあわなかつたんだ」

「やっぱり。でも先生たちはそれでは収まらないだろうねえ」

「そうなんだ。それで最後の手段に出た」

「最後の手段？」

「校長の長男である理事長の自宅に押し掛けて、いろいろと校長の非を並べ立て、校長を辞めさせてくれ、と懇願したんだ。もちろん、自分たちに都合の良いことしか言わないわけだけどね」

「なるほど。上からの圧力を仕掛けたわけか。でも、理事長にとっては自分の尊敬する父親だから、そう簡単にはいかないだろうね」

「そういうことだ。さすがの大地校長も事ここに至って、自分がかんばりすぎると、学校内の混乱も収めることができないうし、理事長も困ってしまうだろうと考えざるを得なくなっただ」

「つらい立場に追い込まれたということだね。で、どうしたの？」

「大地校長には、先生たちの言う通りにすれば、最初は皆満足するかもしれないけど、いずれ学校自体が崩壊してしまうことは目に見えていたんだ。でも、今は一度好きなようにやらせてみるしかないだろうと思ひ、自ら校長職を辞任することを決意したんだ」

「さぞ、残念だったろうねえ」

「理事長も、父親の気持ちがいほど分かっていたので、涙を呑んで引退を宣告され
たんだ」

「親子の情として辛いところだね」

「そこで校長は、今の学校の混乱はすべて自分の責任です、妻の教頭にも責任はあり
ませんと、夫婦の縁を切つて、その責めを一身に受け、学校を去つてしまつたんだ」

「かわいそうにね。で、奥さんはどうされたの？」

「当然ご主人の気持ちは痛いほどわかつていたんだね。だから自分も学校に留まるわ
けにはいかないと、自ら教頭を辞めてしまつたんだ」

「それじゃあ、奥さんは校長について行かれたんだらうね」

「いや、それが違うんだ。全く別の方角へ別れて行かれたんだよ」

「ええ〜」

「校長が東北の方角へ、教頭が西南の方へ去つていったんだよ」

「それつてまったく反対方向じゃない……。アツ、東北の方角といううしろと良うしろということ
だね」

大地は、大きく頷きながら、「大地校長が『良の金神』という例えなんだね」とガテ
ンがいった表情で言った。

「そう、大地校長が『地の大神さま』つまり国祖だね。教頭先生が妻神のひつじさる 坤の金神だ。大地小学校が地球である『地の世界』。そして、学校法人・天地会が『天の世界』で、理事長が『天の大神さま』という例えなんだ。そして、開設当初の立派な学校が、一点のホチから五十六億年経過後の『もとの神代』と言われた時代なんだ」

「あゝ、なるほど。何となくわかったよ。そうすると、先生や生徒、モンスターペアレンツが、国祖に対抗した神々ということだね」

「そういうことだ。この時代の経緯が『霊界物語』の第四巻に詳しく書かれているんだよ」

「へえ。おじいちゃん、その『霊界物語』をとって来てもいい？」

と言いながら大地は、ソファアールから立ち上がり、ご神前のある本棚に向かった。

あゝ大変

大地はご神前のある本棚のガラス扉を開いた。一番上の棚には、『おほもとしんゆ』が七巻。その次に、整然と並べられた『靈界物語』が続いている。

「あつた！」

大地は迷わず第四巻を取り出し、ガラスの扉をていねいに閉めた。

「おじいちゃん、これだね」

リビングに戻った大地は、ソファに腰を下ろしながら『靈界物語』を松太郎に手渡した。

「そうだ、これだ」

『靈界物語』を手にした松太郎は、カバーケースから本を取り出し、ページをめくろうとしたがすぐに手を止め、テーブルの上の眼鏡ケースから老眼鏡を取り出して掛け、あらためてページをめくった。

「ここだ、ここだ」。目的のページを開き、確認するように言った。

大地は、文面が見やすいように、松太郎の横に座り直した。松太郎が開いたページには、「第四五章 あゝ大変」とあった。

「おもしろいタイトルだね」

「一見そう思えるだろうが、それはそれは大変なことだったんだなあ」

大地は、一瞬真剣な表情になった松太郎の表情を見逃さなかった。その顔をのぞき込みながら言った。

「おじいちゃん、この章にさつき話してくれた例え話の経緯が書かれているの？」

「そうだよ。この章の最初の四行で、国祖に対抗する神々が天の大神さまに向かつて、国祖のご退隱を進言するんだ。これは畏れ多いことなんだ。大地、この五行目から読んでごらん」

大地は、松太郎が指差した行から声に出して読んだ。

『天上の大神といえどもその祖神は、国祖国治立命なれば、大いに驚きたまい、いかにもして国祖の志を翻さしめ、やや緩和なる神業神政を地上に施行して、万神の心を和めしめ、従来のごとく国祖執権の下に諸神人を統一せしめんと焦慮せられたるは、骨肉の情としては実にもっともの次第なりというべし』

「最初のところに、『天上の大神といえどもその祖神は、国祖国治立命なれば』とあるが、ここで、国祖と天の大神さまが親子の関係だというのが分かるだろう」

「そうだね。でもおじいちゃん、国祖は国常立命じゃなくて、国治立命って書いてあ

るけど、この時点では呼び方が変わっているんだね」

「国祖が地上の神政を行われるようになってからは、国治立命と呼ばれるようになったんだ」

「前にも聞いたけど、昔の武士のように時代とともに名前が変わるということだね」

「そういうことだな。大地は今、いきなり第四巻のこのページから読んだから、いろんな神さまの名前が出てきて戸惑うだろうが、いずれ第一巻から順に拝読したらいいがなあ」

「そうだね、そうするよ」

「ともあれ、天の大神さまには、骨肉の情、つまり親子の情があり、何とか国祖に緩やかな指導をしてもらって、今まで通り地上の主宰神にとどまってもらいたいと願っておられたんだ」

「でも、国祖は頑としてゆずれられなかったんだね」

そう言うと、大地はページをめくり読み進んだ。

「おじいちゃんから例え話を聞いていたから、何となく分かる気がするけど、国祖はとても厳格だったんだね。ここに、『されど、至正、至直、至嚴、至公なる国祖の聖慮は、三体の大神の御命令といえども容易に動かしたまわざりける』って書いてあるね」

「地上の神々のほとんどが、国祖の方針やその厳しさに反発して、一致団結して国祖の追放にかかったんだ。これは多数決の弊害ということにもなるだろうなあ」

「必ずしも多数決がいいということではない、ということだね」

「そういうことだな。日本の国会で決まる法案も多数決原理で採決されるけど、全部が正しいとは言いい切れない。脳死臓器移植法^{ろしぞうき}もわかりだ。一律に脳死は人の死だとすることは、神さまのみ教えに照らして、どう考えてもおかしなことだからなあ」

「ん、そうだねえ」。大地は頷きながら答えた。

松太郎は、眼鏡に手をやり、それをはずし、眼鏡ケースから出したクロスでいいいにレンズを拭き、それから元にもどした。大地が手にしている物語の文面を指でなぞりながら、先を読んだ。

『三体の天の大神は、ほとんど手を下すに由なく、ここに国祖の御妻豊国姫命^{おんつまとよくにひめのみこと}を天上に招きて、国祖に対し、時代の趨勢^{すうせい}に順応する神政を施行さるるよう、諫言^{かんげん}の労を取らしめんとしたまいぬ』とあるが、ここが、天の大神さまが、妻神から国祖をいさめるように頼まれた部分だな」

「でも、ダメだったんだね。続きに『断乎^{だんこ}として妻の諫言^{しんげん}を峻拒^{しゅんきょ}し、天地の律法の

神聖犯すべからざるを説示して寸毫も譲りたまわざりける』と書いてあるね」

「そういうことだなあ」

「ねえ、おじいちゃん。ここに書いてある『天地の律法』というのは、例え話の中で出てきた学校の校則に当たるものなの？」

「よく察しがついたなあ。その通りだ」

「それは具体的なものがあるの？」

「あるとも。内面的な律法と外面的な律法があるんだ。確か、『靈界物語』の第二巻にあつたと思うんだが…」

「じゃあ、取ってくるね」

大地はすぐに立ち上がって、再びご神前間の本棚から一冊を抜いてきた。

「はい、第二巻だよ」

「どれどれ……」

松太郎は、同じようにページをめくって目当ての箇所を開いた。

「『第四章、天地の律法』、ここだな」

「そのものズバリの見出しだね」

「読んでごらん」と、『靈界物語』を大地に返した。

「『地の高天原たかあまはらに宮柱太みやはしらしき立て千木高ちぎしりて鎮まりいます、国治立命、豊国姫命の二神にしんは、神界のかくまで混乱の極に達し、收拾しゅうじゅうすべからざるにいたりしは、諸神人に対し、厳格なる神律の制定されざるに基づくものなりとし、ここに天道別命あまのわかのみこととともに律法を制定したもうた』」

大地がここまで読んでから、松太郎は言葉をはさんだ。

「国祖夫妻は、神界が乱れてしまったのは、厳格な規則がないからとして、天地の律法を、天道別命という神さまといっしよに制定されと書いてある」

「天道別命？」

「この神さまは、後に再び地上に律法を広めるために再臨したモーゼだと言われているなあ」

「へえ、あのモーゼなの」

「先を読んでごらん」

「『その律法は内面的には、

反省かえりみよ。恥はぢよ。悔くい改あらためよ。天地あつちを畏おそれよ。正ただしく覺さとれよ

の五戒律であつた。

また外面的の律法としては、

第一に、夫婦の道を厳守し、一夫一婦たるべきこと。

第二に、神を敬い長上を尊み、博く万物を愛すること。

第三には、互いに嫉妬み、誹り、偽り、盗み、殺しなどの悪行を厳禁すること等の三大綱領である』。

ん、当たり前のことだけど、厳しい律法だね」

「そうだな。でもその後には、『これより高天原は規律正しく、ことに一夫一婦の道は嚴格に守られていた』と書いてあるように、この律法の施行によつて、もとの神代は、うまく治まつていたんだ。特に、『世の乱れの元は夫婦の道から』と言われるくらいだからね」

「なるほどね」

「もつとも、この『天地の律法』は、今も厳然としてあるわけだからなあ」

「えつ、今もあるの?」

「そりゃあそうだよ。この地球がある限り、普遍の律法だからな」

「そうか、じゃあ、僕たちもこれを守らないといけないわけかあ。厳しいなあ」

「そういうことだ」

「で、おじいちゃんは、キツチリ守ってる？」

「もちろんだとも」

と答えながら、松太郎は苦笑いした。

大地は、「話をもともどそうか」と言った。

「そうだな。さて、国祖に反抗する神々が、天の大神さまに対して、国祖のご退隠たいいんを懇願し続けるわけだ。とうとう仕方ないということで、天の大神さまも自ら地に降りられて、国祖に対して、地上神界の主宰神をご退隠されるよう伝えられることになったんだ」

「非常事態という感じだね」

「ところが、国祖はそのことはちゃんと知っておられた。そのへんの事情が、続きにあるだろう」

と、松太郎は、第四巻の続きの文面を指差した。

大地は、持っていた第二巻をテーブルに置き、第四巻を手にし、松太郎が示した箇所から続けて読み進めた。

神 約

大地は、松太郎が示した個所を人差し指で確認してから、霊界物語を読み始めた。

「ついに自ら天上より三体の大神相ともないて聖地に降らせたまい、国祖大神をして聖地エルサレムを退去し、根の国に降るべきことを涙を呑み、もって以心伝心的に伝えられたりける」

大地がここまで読んで、松太郎が言葉をはさんだ。

「『以心伝心的に伝えられた』、とあるだろう」

「そうだね。ということは、言葉を交わされたんじゃないということなの？」と大地が聞いた。

「そういうことだな。『涙を呑んで』という言葉から、天の大神さまが、悔しさや悲しさを堪えられ、いかに無念であったかということかをうかがい知ることができると思うんだ。そして、その思いは、国祖も全く同じだった。二神は、相対されただけで、お互いの心が通っていたんだろうなあ。だから、そのあとに国祖の大神さまが、ご自身

の意志を表示された言葉があるけど、その前に、『三体の大神の深き御心情を察知し、自発的に』と書かれているだろう」

大地はうなずきながら、その先を目で追った。

国祖大神は、三体の大神の深き御心情を察知し、自発的に、

『吾は元来頑迷不靈にして時世を解せず、ために地上の神人らをして、かくのごとく常暗の世と化せしめたるは、まったく吾が不明の罪なれば、吾はこれより根の国に落ちゆきて、苦業を嘗め、その罪過を償却せん』

と自ら千座の置戸を負いて、退隱の意を表示したまいける。

ここまで読むと大地は、「なるほど、そうだね」と言った。

「神々が国祖の言うことを聞かなくなつて、わがまま勝手になつたばかりに、悪いことが頻繁に起こるようになって、世の中は、にっちもさっちもいかないようになった。それなのに、神々は、“これは主権者である国祖が悪いからだ”と、その責任を全部国祖にかぶせてしまった。国祖はあえて、その言い分を受け入れ、“自分が悪かったからそうなつてしまったんだ”と、すべての罪を一身で受けられ、ご退隱されることを決

心されたんだ」

「国祖の思いは、僕にはとうてい理解できないけど、まさに “断腸の思い” だったんだらうね」

「そうだなあ」と言いながら、松太郎は一つため息をついて、話を続けた。

「大地、ここを見てごらん」と、続きの個所を指差した。

大地は一字一句を確認するように、声に出して読んだ。

「さて三体の大神は国祖にむかって、

『貴神は吾が胸中の苦衷を察し、自ら進んで退隠さるるは、天津神としても
千万無量の悲歎に充たさる。されど吾また、一陽来復の時を待つて、貴神を元の地
上世界の主権神に任ずることあらん。その時来らば、吾らも天上より地上に降り来
りて、貴神の神業を補佐せん』
と神勅厳かに宣示したまいけり」

「この天の大神さまのお言葉の最初の部分は、さっき言った国祖の心中と自らのご退
隱の意志のことだというのはわかるかな？」と松太郎が聞いた。

「うん、わかるよ」

「そのあとの、『されど吾また、一陽来復の時を待つて、貴神を元の地上世界の主権神に任ずることあらん。その時来らば、吾らも天上より地上に降り来りて、貴神の神業を補佐せん』というところが大切な部分なんだ」

「一陽来復の時を待つて、というのはどういう意味？」

「一陽来復というのは、もともと、冬が去つて春が来ることなんだが、転じて、悪いことの重なつたあとに、やっと良いことがめぐつてくるという意味なんだ。だからここでは、『時機が来たら』ということだね」

「じゃあ、『貴神を元の地上世界の主権神に任ずることあらん』ということだから、その時機が来たら、国祖を元の立場に戻すよ、ということなの？」

「そういうことだ。そして、その時には、天の大神さまも地上に降りて来られて、国祖の神業をお手伝いします、と約束されているんだ」

「天の大神さまと地の大神さまと、そんな約束があつたんだね」

「神さまの約束だから、これを『神約』と叫ぶんだよ」

「神約……」と、大地は言葉を繰り返した。

「で、おじいちゃん、その神約は果たされたの？」

「もちろん果たされたし、今もその約束が実現されている最中だと言ってもいいんだよ」

「今も？」

「ああ、そうだよ。人間の約束事なら、ある一点や一時期だろうが、神さまのスパンは長いから、神約実現を一点に絞るものではないと思うんだよ。神約実現のスタートは、大本が開教した一八九二年、明治二十五年と言えるだろうなあ」

「ああ、そうなのか」

「まあ、このことに関しては、あとで順番に話していくとして、先を続けようか」
大地は、ちよつと不満そうな顔をしながらも「はい」と返事をした。

松太郎は話を続けた。

「神約が結ばれたあとに、国祖が夫妻の縁を断たれたことが書いてあるだろう」
「あ、ここだね」

と、大地は霊界物語のページに目をやった。

ここに国祖大神は、妻の身に累るいを及およばさんことを憂慮ゆうりよしたまいて、夫妻の縁を断ち、

ひとり配所に隠退したまいけり。国祖はただちに幽界に降りて、幽政を視たもうこととなりぬ。されど、その精霊は地上の神界なる、聖地より東北にあたる、七五三垣の秀妻国にとどめさせたまいぬ。

諸神は国祖大神の威霊のふたたび出現されんことを恐れして、七五三繩を張り廻したり。

ここに豊国姫命は、夫の退隠されしその悲惨なる御境遇を坐視するに忍びずして、自ら聖地の西南なる島国に退隠し、夫に殉じて世に隠れ、神界を守護したまいける。ここに良の金神、坤の金神の名称起れるなり。豊国姫命が夫神の逆境に立たせたもうをみて、一片の罪なく過ちなく、かつ、いったん離縁されし身ながらも、自ら夫神に殉じて、坤に退隠したまいし貞節の御心情は、実に夫妻苦楽をともになすべき倫理上における末代の亀鑑とも称したてまつるべき御行為なりというべし。

「ここでは、三つのことが書かれているなあ。

一つは、妻神の貞節と夫婦のあり方。

二つ目は、夫婦神がご退隠された場所について。

そして三つ目が、七五三繩のことだ」

「なるほど三つあるんだね」

「まず一つ目。国祖は妻神のことを思い、妻に罪が及ばないように離縁されたこと。これは奥さんに対して、ものすごい思いやりだなあ。そして妻神はというと、あくまでも夫神を信じて、自ら国祖と反対の方へ身を隠された。なかなかできることじゃない。だから、倫理上において永遠のお手本であると示されているんだよ」

「熟年離婚とかが多くなっている今の人間とは大変な違いだね」と大地はうなずいた。

「二つ目が、夫婦神のご退隱地のことだなあ。国祖は幽界ゆうかい、つまり地獄界に降りられたんだが、その精霊は地上に隠れて密かに留まり、神代の聖地・エルサレムがあった現在のトルコのエルズルムあたりから見て東北にあたる、七五三垣しわがきの秀妻国ほつまのくに、つまり今の日本にご退隱されたと示されているんだ」

「七五三垣の秀妻国というのは、日本のことだったのか」

「秀妻国というのは、秀真国とも書くが、とてもすぐれた国ということで、日本国の美称なんだよ。だから、七・五・三のリズムで波が打ち寄せる島国・日本ということだな」

「あ、そういう意味なのか。とてもきれいな言葉だね。で、奥さん、いや妻神の豊雲野命さまは、どこにご退隱なさったの？」

「国祖と正反対の方位だから、聖地から西南に当たるサルジニア島というところに一

時ご退隱になったんだよ」

「サルジニア島？ よく知らないところだね」

「地中海西部にある小さい島だが、私も行ったことはないがね」

「だよね」

「それから三つ目が、七五三繩しめなわだ」

「しめ縄って、神社の鳥居とかにかけてある大きな繩のことだよね」

「そうだよ。今でこそ、神域などを占めず結界けっかいのように使われているがなあ」

「結界？」

「そう、結界」

「結界なら知ってるよ」

「ほう、知ってるか？」

「今、テレビでも放映している『結界師』というアニメがあるんだ」

「なんだ、漫画か」

「そうだよ。人気のあるアニメで、妖怪退治の専門家なんだよ」

「そ、そうか。おじいちゃんは知らないなあ」

「まあ、そうでしょうね」

松太郎は、一つ咳せき払いをして話を続けた。

「そもそも七五三縄というのはなあ…」

七五三縄と調伏行事

「七五三縄というの？」

と、大地は、松太郎の言葉を繰り返した。

「七五三縄というのは、神社の神前や神事の場所への、不浄なものの侵入を禁じる印として張る縄のことだよ。現在ではいろいろな種類があるようだなあ」

「つまり『結界』ということだね」

「そういうことだなあ。もつとも、今では、神さまが宿っておられる印として、ご神木や、山の中の大きな岩、海に立っている岩なんかに張られているようだ。伊勢の二見浦の『夫婦岩』なんかは有名だなあ」

「ああ、あの二つの岩の間に張ってある縄だね。岩の間からの日の出の写真が、よく年賀状に使われたりする風景だね」

「そうだ。それから巨大な七五三縄となると、島根県の出雲大社の神楽殿かぐらでんの七五三縄が有名だな」

「その七五三縄ならテレビで見たことあるよ。参拝者が縄に向かってお金を下から投げたよ」

「そうそう、実際にお参りしたことあるけど、たくさんの硬貨が挟はさまっていたなあ」

「おじいちゃんは、出雲大社に行ったことがあるんだね」

「まあそりゃあ、長く生きてるからね」

松太郎は、笑いながら話を続けた。

「一般の家庭でも、神棚がある家だと、お宮の前に小さな七五三縄を張ったり、正月には、しめ飾りをしたするなあ。それから、家を新築する時には、地鎮祭じちんさいをするけど、その時、敷地の四隅に竹を立てて、縄を張っている風景を見たことないかなあ」

「あるある」

「実は、あれも七五三縄と同じ意味で、結界のひとつなんだ」

「だったら、七五三縄を張ることは悪い習慣ではないんじゃないの」

と、大地は不思議そうな顔をした。

「確かに、現在ではそう受け取られているかもしれない。だが、もともと、さっきのお示しにあるように……」

と、松太郎は『靈界物語』の文中を指差した。

「ほらここに、『諸神しよしんは国祖大神の威靈いれいのふたたび出現きようげんされんことを恐畏きょういして、七五三

繩を張り廻まわしたり』と書かれているように、その本当の起源は、国祖が再び現れないようにとの、神々の思惑おもわくにあるんだよ。つまり調伏ちようふくの意味なんだ」

調伏という言葉聞いて、大地は、「あつ」と何か思いついたような声を出した。そして、ポケットをさぐり、手のひらを広げた。そこには、昨夜の節分大祭の豆まきで拾った大豆があった。

「調伏と言えば、この豆と同じ意味なんだよね」

「そう、一般の節分の豆まきは、調伏行事なんだ」

「でも、大本の豆まきは、鬼は内、福は内」と、掛け声も違うんだったよね」

「そういうことだ」

大地は、また思い出したように言った。

「そういえば、おじいちゃん、なぜ生の大豆を使うのか、まだ説明を聞いてなかったよ」

「おっ、そうだったかなあ」

「そうだよ。ねえ、教えてよ」

「よしよし。豆まきというのは、悪魔の目に向かって投げつけて、目つぶしをする調伏行事だということは言ったな」

「はい」

「最初に国祖を退隱に追いやった神々は、煎いった豆を投げながら、こう言ったそうだ。『二度とこの世に出てくるな。でも、もしこの煎り豆から芽が出てくることがあれば、出て来てもいいぞ』と」

「ええ、ひどい話だね。煎った豆から芽が出てくるわけがないじゃない」

「そう、ひどい話だよ。でも、国祖の神さまは、『時節じせつを待てば煎り豆にも花が咲いて、此の世に出して貰もらう』とおっしゃっているんだよ」

「すごい確言だね」

「だから、大本では、ちゃんと芽が出るように生の豆を使うんだ」

「そうだったのか」

「それから、さっきの地鎮祭の話だが、大本で祭典をする場合は、縄を張らない。その代わりに、敷地の四隅に盛り土をして松の小枝を立てるんだよ」

「そうなんだ。そりゃあ、家を建てるんだったら、神さまの『元祖の元祖』である国祖の神さまに来ていただきたくないよね」

「そうだなあ」

「おやおや、話はずんでいるようですね」と言いながら、ともがお茶を運んで来た。

「一服したらどうですか」と、二人の前にお茶の入った湯呑みを置いた。

「おばあちゃん、ありがとう」

「おじいさんの話はおもしろいかい？」

「うん、おもしろいねえ」

「そうかい、そりゃあ良かった」

松太郎と大地は、湯呑みを持ち、お茶をすすった。大地は、松太郎に質問を続けた。

「ほかにも調伏行事というのはあるの？」

「ああ、あるとも。国祖・国常立命さまは、たたり神だ、恐ろしい神さまだ、再び世に出てもらっては困ると、いろいろな生活習慣の中に調伏の行事を取り入れてきて、それが今も良き伝統のようになってるんだ」

「どんなものがあるの？」

「例えば、お正月につくる紅白の鏡餅。これは良の金神の骨や肉をついたものとして食べてしまう。雑煮は国常立命さまの臓物とされているんだ」

「へえ、そうだったのか。知らなかったなあ」

「だから、大本では雑煮とは言わず、『神代餅』^{かみよもち}と言いかえているんだよ」

「なるほど、神代餅ね」

「それから、三月三日の桃の節句に食べる草餅は、国常立命さまの皮膚にたとえたもの。

五月五日、端午^{たんご}の節句のちまきは、国常立命さまの髪。

七月七日の七夕の節句に食べる小麦の素麺^{そうめん}は、国常立命さまの筋。

九月九日、菊の節句の菊酒は、国常立命さまの血液だとして吞^のまれていたんだ」

「三月三日と五月五日の節句はわかるけど、ほかはあまりピンとこないなあ」

「そうかもしれないなあ。一年に五度ある五節句^{ごせつぐ}とか五節^{ごせつ}という習慣も、今は知らない

人が多いんだろうな」

「それにしても、節句の行事が調伏の儀式だったとは、意外だったなあ」

「ほかには、正月に立てる門松^{かどまつ}。これは国常立命さまの墓標^{ぼひょう}であるとしたんだ」

「ええ〜！ 門松^{かどまつ}がお墓の印なの？」

「それから、まり遊びは、国常立命さまの頭をもて遊ぶということにし、弓の的は、

国常立命さまの目に見立てたとしてっているんだ」

「ありやあ〜、まいったなあ。おじいちゃん、僕は高校の時には弓道部だったんだよ。

ということは、僕も調伏儀式の片棒をかついでいたのか」と、大地は不安そうな顔に

なった。

「あ、そういえばそうだったなあ。まあ大地は知らないことだったんだから、神さまも許してくださいよ。それに、亀岡の大本の聖地・天恩郷には、その昔、弓道場があって、聖師さまが弓を引いておられる写真が残っているんだ」

「そうなの？」

「真意はわからないけど、大本の中でいろいろな武道が盛んに行われていた時代があって、聖師さまのご指示で弓道場が作られたそうだ」

「なんだか、ちよつと救われた気分」

大地は、ホツとしたような表情で言った。

松太郎は、一口お茶を飲み、湯呑みをテーブルに置いて、話を続けた。

「まあ、そんなことで、国祖がご退隠たいいんされ、二度とこの世に現れないようにと、いろいろなかたちで調伏行事が続けられてきたというわけだよ」

大地は頷うなずきながら言葉を継いだ。

「でも、おじいちゃん。国祖が隠れられたら、それからの世界は、わがまま勝手な神々の天下になってしまった、ということだよね」

「ああ、その通りだ。だがな、ちよつと違ふんだよ」

「えっ、どういうこと？」

「宇宙を創られた天地の親神さまが、本当にご退隱になられたら、ろくなことはないわけだ。そうなると、時の経過とともに、いずれ天地がつぶれてしまつても不思議ではないはずなんだよ」

「でもつぶれなかった」

「実はなあ、国祖は、ご退隱されてから、長い年月を陰から守つてきておられたんだ。ご自身の分け身魂、まあ分身とでも言つたらいいのかなあ、そういう聖者を時々地上に派遣されて、この世がつぶれないように指導して来られたんだよ」

「聖者？」

「例えば、お釈迦さまだとか、キリスト、モハメッド、老子、孔子という歴史上有名な人たちもその聖者だということが、大本神諭や霊界物語によって示されているんだよ」

「へええ、そうなんだ」

「そのことを良の金神・国常立命さまは、『陰から守護を仕て居りた』とおっしゃっているんだよ」

松太郎の説明に、大地はゆっくり二回、首を縦にふった。

トイレの神様

「ご退隱たいいん後も、国祖こくそがこの世を陰から守護しゆてされていた、ということは、ご自身の務めを完全に放棄されたわけではなかったんだね」

と大地は松太郎に聞き返した。

「そういうことだ。もし国祖が、まったくかまわれなくなったら、世界がつぶれるのは明らかだったんだ。なぜなら、この世を創られた神さまだからね」

「そうだね。でもそれだったら、一度何もかもリセットして、最初から創り直されてもよかつたんじゃない？」

「まあ、それも一つの考え方だろうが、でも、気の遠くなるような歳月をかけて創造された世界をつぶしてしまうことは、国祖にとっては堪え難いことだったんだよ。だから、あえて困難な道を選ばれて、しばらく見守られていたというわけだな」

「でも、国祖に対抗した神々たちには、そのことはバレないようにされていたということだね」

「国祖がこの世界のことを一切かまわず、そのまま放っておいたらどんな世の中になるかは、国祖自身には予想できていたと思うよ。考えてごらん大地。親だったら、子

供が小さいうちは、子供の考えていること、やりたいこと、その行動の結果というのがある程度予想がつくんじゃないかなあ」

「ん、僕もまだ人の親になつていないので、何とも言えないけど、たぶんそうなんだろうね」

と言いながら、大地は腕組みをした。

松太郎は例え話を始めた。

「例えば、子供が成長して、三歳くらいになると、自転車に乗りたがるだろう」

「そうだね」

「最初は、三輪車で喜んでゐる。でも少しすると、自転車に乗つてみたくなる。いきなりは無理だから、親が補助輪をつけてやる」

「そうすれば倒れないからね」

「でもしばらくすると、それがかっこ悪いとか、おもしろくないと思うようになって、補助輪をはずしてほしくなるんだ。でも、親としては、まだまだ無理だと思う。子供ははずせと駄々だだをこねる。仕方なくはずしてやるけど、やっぱりすぐに転んでしまう」

「そうそう、僕もそうだった」

「そこで親は、自転車の後ろを持って、子供について走るんだよ。子供は、お父さん手を離して」というけど、今離れたら絶対に転んでしまうことはわかっている。だから、子供の言うことを聞いたふりして、倒れそうになると、後ろで手を添えている、ということがあろう」

「でも、それがバレると子供は怒るよなあ。経験あるよ」

「そう、それで仕方なく完全に手を離すことになるけど、親は少し走ったら、子供が間違ひなく転んでしまうことが分かるわけだ。でも、一度やらせてみることも経験だ」と思い、安全を確認しながら子供の言う通りになってしまうんだ」

「そう、僕もそれでよく転んでたなあ。でもそうやって自転車に乗れるようになっていったと思うよ」

「転んで擦り傷かすくらいのケガならいいけど、もし、交通事故にでも遭あうような状況なら、親も断固として手を出さだろう」

「それはそうだね」

「自転車の乗り方と、この世の行く末をいっしょにはできないけど、国祖はとにかく、しばらくの間、神々にやらせてみることにされた。そしてぎりぎりまで見守られていたんだよ」

「国祖にとつては、とてもつらい日々だったんだろうね」

大地は、思いついたように松太郎に聞いた。

「ところでおじいちゃん、国祖と妻神つまがみのご退隱のことは詳しく聞いたけど、ご退隱されたのはこの二柱だけで、ほかには誰も国祖についていく神さまはなかったのかなあ？」

「ほお、大地いいところに気づいたなあ」

松太郎は感心したような表情で言った。

「もちろん、国祖を慕したつて共にご退隱された神さまはいらっしゃったし、国祖に先立つて世に落ちてしまった神々もあつたんだよ」

「やっぱりそうか」

「国祖に対抗した神々は、国祖のために働いていた神々さまを、追放するよう国祖に迫っているんだ」

と言いながら、大地の前にあつた『靈界物語』第四巻を手に取り、ページをめくつた。第四十五章あゝ大變」の章より少し前にもどり、文中を指差した。

「ここを見てごらん。『国祖も事いここにいたりては如何いかともなしたもうの余地なく、そ

の請求を容れて大八洲彦命、言霊別命、神国別命、大足彦を根の国に追放したまう

ことを承認されたりける』とあるだろう。この神々さまが国祖を助けておられた神さまだけど、国祖に先立つて世に落とされた神さま方なんだよ」

「そうなのか」

「それから、その後にも書かれているなあ。『次に高照姫命、真澄姫、言霊姫、竜世姫は、大地の底深く地汐の世界に神退われたまい、地汐の精霊に感じて大地中の守護神と現われ、四魂合同して金勝要之神となり、時を得て地表の世界に出現し、五六七神政の基礎的の神業に尽力されつつ太古より現代に至るまで神界にあつて、その活動を続けられつつありしなり』というところがそうだな」

「地汐の精霊に感じてとか、四魂合同してとか、ちよつと難しいけど、とにかく国祖を助けておられた神さま方も、国祖と同じように、悪神にわからないように、陰で活動されていたということだね」

「そういうことだなあ」と松太郎は頷いた。

「この神さまは……」と言いながら、松太郎は先に示した「霊界物語」の文中を指差した。「金勝要神という神さまは、実は大本の二代教主さまのご神格なんだよ」

「ご神格？」

「よく、あの人は人格者だとか、人格のある人だ、なんて言うことがあるだろう」

「はい」

「神さまの場合はそれを『神格』^{しんかく}というんだ」

「ああ、なるほど。で、二代さまが……」
と言いながら、大地はご神前の部屋の写真を見た。

「あの聖師さまのとなりの方だよね」

「そうだ。あの二代さまのご神格が金勝要神さまなんだ」

「で、どんな神さまなの？」

「金勝要神は、『大地の金神さま』とも申し上げていますし、^{かわや}「厠の神さまとも言われる神さまで、国祖同様、たいへんなご苦労をなさった女神さまだそうだ」

「おじいちゃん、カワヤって、ナニ？」

「トイレのことだよ。もっとも昔は今のようなきれいな水洗トイレではなかったがね」

「僕も昔のボットン便所のことは覚えているよ」

「その厠^{かわや}の神さまは女性の神さまで、とつても美人だそうだ」

「おじいちゃん、神さまだから美人じゃなくて、『美神』ということだね」

「あはは、そうだな」

松太郎は思い出したように言った。

「そうそう、節分大祭の前日に、車のラジオで、『トイレの神様』という歌が流れていてんだが、大地は知ってるかい？」

「いやあ、知らないなあ」

「初めて聴いたし、歌詞が関西弁だったから、きつとまだ全国版にはなっていないのかもしれないけど、とつてもいい歌で、おじいちゃんは感動したんだよ」

「へえ、そうなの。長野へ帰ったら一度インターネットで探してみるよ」

「確か……、植村花菜^{かな}という関西の若い女性の歌手が歌ってるんだが、その子のおばあちゃんとの思い出の歌なんだ」

「僕は知らない歌手だなあ。まだメジャーじゃないのかもね」

「トイレにはきれいな女神さまがいて、毎日トイレを掃除したら『べっぴんさん』になれるんだ、という歌詞だなあ。これは昔から一般でも言われていたことではあるんだ。でも、まさかそんなことが歌になるとは思ってたからな。聴いていて涙が出てきたよ。おじいちゃんたちにとっては、『トイレの神様』とは、まさに『金勝要神さま

“ のことだからね ”

「へえ、そんなにいい歌なら絶対聴いてみるよ」

「今この時節にこんな歌が歌われるようになるということは、何か意味があるんだと思うよ。おじいちゃんは、半年くらいしたら、きっと全国的に有名になるんじゃないかと、期待しているだがない」

「そうなたらいいね」

「歌詞の最後でこの歌手は、今でもトイレ掃除をかかさないと歌ってたなあ」

「へえ、すごいね」

「大地は家でトイレの掃除はしてるかな？」

「いや、あんまりしたことないなあ」と、大地は頭をかいた。

「おじいちゃん、トイレの話は置いといて、国祖がご退隠され、国祖についていた神々が世に落とされてしまっただけの世の中はどうなったのかなあ？」

「さっきの子供の自転車じゃないけど、そううまくいくはずはないわけだ。ましてや国祖をご退隠に追いやったのは、自分たちの都合のよいようにしたいという、われよし、つよいものがちの精神からだからな」

「ということとは、ひどい状況になってきたということだね」

「大地、諸悪の根元はこの『われよし、つよいものがち』の精神なんだよ。その精神を持った者同士で、世の中が平穩に治まることはないんだ。当然、諸罪悪が広がってどうにもならない世の中になっていったんだ」

松太郎は、思わず言葉に力が入った。

国祖のご再現

大地は、松太郎の言葉を繰り返した。

「われよし、つよいものがち……かあ」

「われよし」というのは、自分だけが、あるいは自分の家族だけが良ければ、他人はどうなつてもかまわないという利己主義のことだなあ。それから、つよいものがち、というのには、強い優秀な者が勝ち、弱者は負けてしまうという優勝劣敗、弱肉強食ということなんだ」

「国祖こくそがご退隱たいいんされてから、そんな世の中になつてきたんだね」

『『大だい三さん災さい小しょう三さん災さいの頻ひん発はつも人の心の反映はんえいなりけり』という聖師さまのお歌があるけど、風水害や火災、飢き餓がや病びやう気き、戦争が起おこるのも、その原因は人の心にあるんだ、とお示ししになつているほどなんだ」

「へえ、人の心つてそんなに怖いんだね」

松太郎は頷うなずきながら話を続けた。

「国祖がご退隱たいいんされてから、世の中は乱れに乱れ、大洪水まで起こったそうだ。そして、

このままの世界が続けば、人類のほとんどが滅ほろんでしまう危機に直面してしまい、最後はもとの泥海にもどさなければならぬというギリギリのところまで来てしまったんだ」

「あつ、おじいちゃん。さつき聞いた例たとえ話からすると、自転車の練習をしている子供が脇道から飛び出しそうになって、後ろからついていたお父さんが、あわてて駆けて寄って自転車を止めたようなものだね」

「そうそう、もし止めなかったら、走って来た車にはねられて死んでいたかもしれない、という危機一髪のところだ」

「子供は、びつくりして後ろを見ると、いないはずのお父さんが、自転車の後ろをしつかり押さえてくれていた、ということだね」

「そうだな。でも、子供は命拾いしたということがわかっていないんだよ。どうしてお父さんは止めたんだらうと、むしろ怒っている。それと同じことが、国祖をご退隱に追いやった神々にはあるんだ」

「そうか、この時点では、まだ気づいてないんだね」

「その危機一髪の時が、明治二十五年の節分なんだ。国祖が再び世に現れたというこ
とで、『国祖のご再現』と言っただよ。実は、節分というのは、国祖がご退隱された日

でもあったんだ」

「そうか、だから夕べの節分大祭は、大本でいちばん大切な祭典なんだね」

大地は、前夜の祭典を思い出し、納得したような表情で頷いた。

松太郎は、大地の顔を見て、笑みをうかべていた。

「大地が国祖のことをわかってくれて、おじいちゃんもうれしいよ」

「まあ、何となくだけどね」

「そりゃあそうだろう。初めて聞く話だろうからなあ。でも、何となくでも、国祖のご苦労を知ってもらえたら、うれしいんだよ」

大地は、照れ笑いを返し、「ところで、おじいちゃん」と言葉をついだ。

「国祖ご再現というのは、どういうふうに行われたの？」

「おう、そうだった。まだ肝心のことを話していないな」

「そうだよ」

「国祖のことを『良の金神』^{うしとら こんじん}というのは、午前中に話したね」

「うん、聞いたよ」

「国祖は、自ら『良の金神』と名乗って、出口なお開祖にかかられて、この世に再び

現れられたんだ。そして、この世のすべての神々と人民に対して、ご復権ふっけんの宣言をなさったんだ。あの聖師さまの横のお写真の方だよ。おじいちゃんたちは、「開祖さま」と呼んでいるんだ」と、ご神前に掲げてある肖像写真に目をやった。大地も、同じように、開祖の写真を見上げた。

「神がかりということだね」

「開祖さまの場合は、元の神さまがかかられたということで、神に帰ると書いて、『帰神』というんだ」

大地は、「帰神？」と松太郎の言葉を繰り返した。

「実は、神がかりには、大きく分けて三つの種類があつて、帰神のほかは、神が懸かかると書く、神懸しんけんと、神が憑依ひょういすると書く、神憑しんびようというのがあるんだ。神懸は、国祖にお仕えする正しい神さまがかかること。そして、神憑はキツネやタヌキなんかの動物霊や邪霊がかかる場合なんだ。まあ、世間でいちばん多いのは最後の神憑なんだけどな」

「神がかりにもいろいろあるんだね」

「もつとも神憑でかかった動物霊や邪霊なんかは、絶対に正体を明かさずに、自分は正しい神である」と言つてかかつてくるんだがね」

「じゃあ、その判断は難しいね」

「それを判断することを、『審神』^{さきにわ}というんだが、正しい信仰を持ってないと、動物霊や邪霊にだまされてしまうから、注意が必要なんだよ」

「開祖さまは、自分にかかった神さまが正しい神さまかどうかというのがすぐにわかったの？」

「もちろん、すぐにはおわかりにならなかったんだ。開祖さまも最初は、キツネかタヌキじゃないかと、とても落胆されたそうだし」

「そうだろうね。不安だよ」

「開祖さまが帰神なさったのは、五十七歳の時だけど、ふだんはともきれいな少女のようなお声だったんだ。ところが、帰神状態になると、野太い男の声で神さまが言葉を発せられる。女性の声と、男神の声とで何度も何度も問答を繰り返され、開祖さまは自分にかかった神さまが正しい神さまであることを悟られ、そしてこの神さまに一生をささげようと決意されたんだよ」

「国祖は、最初にどんなことを言われたの？」

『三ぜんせかい いちどにひら九 うめのはな もとのかみよに たてかえ たてなをすぞよ すみせんざん（須弥仙山）に こしをかけ うしとらのこんじん まもる』

ぞよ…」

松太郎は覚えている「お筆先」の一節を大地に伝えた。

「これが、うぶごえ」と言つて、国祖が最初に発せられた言葉だと言われているんだ」「赤ちゃんがおギヤーと泣く、あの産声？」

「そう、それにたとえて、国祖がご復権されて最初に発せられたお言葉ということだな」「なるほど」。大地は頷いた。

大地は再びご神前の開祖の肖像写真に目をやり、松太郎に質問した。

「国祖が復権するに当たり、出口なおという人でなくてはならなかったの？」

「その通り、出口なおという人でなくてはならなかったんだよ。後に、開祖さまのご神格は、稚桜姫命わかぐらひめのみことまたは稚姫岐美命わかひめぎみのみことということがわかるんだが、一般あまてらすに天照大神さま

の妹の神さまといわれていて、伊勢の「香良洲神社」からすじんじやにも祭られている神さまなんだよ」

「ああ、ご神格ね」

「この神さまは国祖の娘に当たる神さまで、国祖のご退隠に先立っていちばん苦しいところに落とされてご苦労され、国祖とともに陰でお働きになっていったんだ。そして、人間として何度もこの地上に生まれてこられ、そのたびに苦しい生涯を繰り返してこ

「それはないへんなことだね」

「それはたいへんなことだね」

「現実的な神さまのご用をするためには、どうしても肉体が必要で、世界中で出口なおという方でなければならなかったということなんだなあ。良の金神・国常立命くんとたちのみことさまをこの世でお祭りできるただ一人の方だったとも言えるんだよ」

「なんだか、周到に準備をされた綿密ちみっなプログラムが組まれていた、という感じだね」

「その通りだな。しかもそれが、悪神には絶対にはわからないようにしてあつたそうだし、なるほどね。バレたらまた邪魔されてしまうよね」

「そう、バレたら大変だ。大本では、国祖が復権されたこの明治二十五年の節分を、教の年としていて、今年で百十八年になるんだ」

「じゃあ、再来年が百二十年になるんだね」

「そう再来年も大きな節目の年になるだろうなあ」

「ところでおじいちゃん、確か国祖の神さまと天の神さまの間で、神約が交わされたこと教えてもらったけど、あれはどうなったの？」

「おお大地、そのことを覚えていたかあ」

松太郎は、右手で一つ膝ひざをたたいた。

神と神との約束

「神約はなあ」と、松太郎は話を始めた。

「国祖こくそがご退隱たいいんされる時に、天の神さまと交わされた約束のことだが、その約束が守られたのがいつだったのか、知りたいんだろう」

「そうそう」と大地は頷うなずいた。

「天の神さまは、時期が来たら、国祖を元の地上世界の主権神に任じますよ。その時には、私たちも天上から地上に降りて来て、あなたのお仕事を手伝いますよ、ということのだったなあ」

「うん、すっかりおぼえているよ」

「ということは、神約実現の始まりは、間違いなく開祖がご帰神された時、つまり大本が開教した明治二十五年と言えらるだろうなあ」

「やっぱりそうか。じゃあ、もう約束は果たされたということだよな」

「いや、そうとは言い切れないなあ」

「え、どうして？」

「午前中にも話したかもしれないが、人間の約束事なら、ある一点や一時期だろう。と

ところが、神さまのスパーンはとても長いから、神約が果たされるのをある一点に絞り切れないと思うんだよ。だから、神さまの約束はすでに果たされ、そして今も実現している最中だと言つてもいいんだよ」

「今も？」

「霊界物語では、とても簡潔に書いてあるけど、神約というのは人智を超えた深いものだと思うよ。それは、天の神さまと国祖の間でしかわからないはずなんだ。そうでなければ、国祖を押し込めた悪神にも知られてしまつて、簡単に邪魔されかねないからね」
「なるほど。ということは、事前には知られないようにしてあるということかなあ」

「おそらくそうだろうなあ。あとになつて “ああ、そういうことだったのか” というものだと思うなあ」

大地は、少し首を横に傾けながら、松太郎に質問した。

「今、おじいちゃんが言つた “ああ、そういうことだったのか” というのはあつたの？」
「もちろんあつたよ」

「へえ、それを聴きたいなあ」

「じゃあ、二つだけ教えてあげようかなあ」と、松太郎は笑顔で答えた。

「あの聖師さまが…」と、松太郎はご神前の写真に目をやった。それにつられるように大地も視線を移した。

「聖師さまは開祖さまとともに、大本の二代教祖のお一人で、明治三十一年に神さまのお導きによって、初めて開祖さまに会われた。そしてその翌年に大本入りなさり、明治三十三年に二代さまと結婚されたんだ。それから精力的に教団としての組織作りや布教活動を進められたんだ」

「この『霊界物語』を口述されたんだったよね」と、大地はテーブルの霊界物語を手に取った。

「それは、大正十年からなんだが、実は大正五年まで聖師さまは、教団の中で旧役員らから排斥はいせきされておられたんだ」

「排斥？ どうして？」

「実はお筆先の中で、聖師さまを守護している精霊が『素盞鳴尊すさのおのみこと』や『小松林の霊こまつばやし れい』という名前で出てくるんだ。この神さまは悪神であるといわれていたために役員からのしられたり、排斥されていたそうなんだなあ」

「そういうことか」

「ところがそれを覆くつがえす出来事が起こったんだ」

「いつ？」

「大正五年のことだ」

「大正五年というところ…」

大地は年号を計算した。

「一九一六年だから……、開教してから二十四年もあとだね」

「そうなるかな。この年の九月に、“神島開き”という神事が行われたんだ」

「神島開き？ どういう神事だったの？」

「簡単に言うと、今の兵庫県の高砂市沖にある神島という小さな無人島に、国祖の妻神つまがみであった坤ひつじの金神こんじんさまがご退隠たいいんになっていて、その尊い神さまを綾部の聖地にお迎えし、世にお出しするという神事だったんだ」

松太郎は小さく咳払いをして、話を続けた。

「その神島開きの時に、開祖さまのお筆先に、『坤の金神』、それに『素盞鳴尊』や『小松林の霊』も、実は『みろくの神』で、根本の天のご先祖さまであるということが示されたんだよ」

「なるほど、聖師さまの靈魂が、国祖と神約を交わした天の大神さまだったというんだね」

「そうなんだ。いちばん驚かれたのは開祖さまだったろうなあ。神さまは、こんな大切なことを、開祖さまにすら最初から明かしておられなかったんだよ。開祖さまがご昇天になるのが、その二年後の大正七年十一月だからねえ」

「なかなか厳しい話だね」

「だから、聖師さまが大本入りをされた時点で、神約は実現されていたわけだけど、はっきりと示されたのはそれから、二十年近くたってからということになるわけだ」

「そういう意味で、神約というのは、人間同士の約束事とはスケールが違う、ということだね」

「そういうことだ」

大地は、納得したような表情で言葉を継いだ。

「で、もう一つは？」

「それは、長生殿の完成だよ」

「長生殿って、夕べ節分大祭があったあの神殿だよね」

「長生殿は、今から十八年前の平成四年、開教百年の年に建ち上がったんだ。大本信徒にとって永い間の悲願の神殿だったんだよ」

「信者さんが待ちこがれていた神殿だったということだね」

『神約が実現する』ということは、この地上の世界にあつては、天の神さまと地の神さまをあわせて拝ませていただけると解釈できるだろう。だからそんな神殿を建てなければならなかったんだ。今、長生殿のご神殿では地の大神さまをお祀りし、そしてその奥にある本宮山ほんぐうやまには、天の大神さまをお祀りしているんだ。だから、長生殿でお礼拝をするというのは、天と地の大神さまをあわせて拝んでいることになるんだ」

「へえ、長生殿ってそんなすごい神殿なんだね。で、建てるのにどのくらいの期間がかかったの？」

「大本が本宮山を入手した大正八年以降からだから、七十年くらいだな」

「おじいちゃん、それは時間かかり過ぎでしょ」

「実は、三度目の造営にして、初めて建ち上がったのが今の長生殿なんだよ」

「あつ、それなら納得。ということは、それまで二度は建ち上がらなかったということだね」

「そう、二度とも大本事件という国家による宗教弾圧によって、途中で破壊されたんだ」

「ああ、大本事件ね」

「大地、知ってるのか？」

「何となくだけどね。不当な弾圧で、結局冤罪えんざいだったんでしょ」

「そうなんだよ。最初は大正十年に本宮山の上に、『本宮山神殿』として建ち上がったんだけど、第一次大本事件で、正式に神さまをお祀りする前に、無惨にも取り壊されてしまったんだ」

「ひどい話だなあ」

「二度目は昭和十年。この時も本宮山の上だったんだが、建設途中で第二次大本事件が起こってしまっただ。今は、本宮山の上に残った長生殿の十字形の礎石の上に『月山不二』という築山があつて、そこに天の大神さまをお祀りしてあるんだよ。そして三度目にしてやつと、本宮山の裾野に今の長生殿が建ち上がったんだ」

「そうか、だから“悲願の神殿”と言われたわけなのかあ」

大地は、大きく頷いた。

「つまり長生殿はこの地上における『神約実現の証』なんだよ。聖師さまはお歌を通して、長生殿建ち上がりたるあかつきは

神の経緯しぐみも漸くようや成らむ

大神の鎮まり給たまふ大宮の

成らずば神業しんぎょう成らざるを知れ

とおっしやつてゐるんだ。だから今は神約実行の真っ只中だと言つていいと思うんだ」

「おじいちゃん、神約つて奥が深いね」、大地は感心した表情でそう言った。

台所からとももの声がした。

「さあさあ、話はそのへんにして、そろそろ夕食にしませんか」

時計の針は、午後六時を少しまわっていた。

「おう、もうそんな時間か」

「時間が経つのが速いなあ」

「それじゃあ、夕食の前に夕拝をさせていただきますこう」

「はい」

「よっこらしよ」と松太郎はソファアールから腰を上げた。

「何だかお参りする気持ちが違つてきたなあ」

大地は小さい声でそう言いながら、松太郎のあとについてご神前に進んだ。

二、あの世とみたままつり

先祖のまつり

「どうしてだろう…」

大地は松太郎の後ろに座り、「おほもとのり」とを手に、神言を奏上しながら思った。子供のころ、母・京子といっしょに里帰りして、以前にもこうして祝詞を奏あげたことはあった。

「でも、何となくありがたく、あつたかい、こんな気分になったのは初めてだなあ」
大地はそう感じていた。

昨日までは、就職活動がうまくいかず、毎日悶々もんもんとしていた。それが母のすすめで、長野から綾部に訪れ、昨夜の節分大祭に祖父・松太郎と参拝してから、何かが変わってきた。

そして今日一日、松太郎から神さまについて多くの話を聞いた。神さまの歴史、大
本はなぜ生まれたのか、二人の教祖のこと、「神約しんやく」のこと。大地にとってどの話も新

鮮なものであつた。

神さまの悠久の歴史に思いを馳せるとき、自分の悩みもさしたることはないのかも
しれない、とも思つた。しかし、そこは現代っ子、やつぱり現実は大切である。

気がつくとき大地は、「どうか良いところに就職できますように」と祈つていた。

夕拝が終わり、二人はそれぞれ風呂呂に入り、松太郎と大地は向かい合せて食卓に
ついた。鍋から湯気が上がつていて、横の大皿には、カニが盛られていた。祖母・と
もが作つたいくつかの手料理も並べられていた。

「うわあー、カニだあ、おいしそう！」

「大地のために、今日は奮発したよ。さあ、ビールでも飲むかい？」

ともが尋ねた。

「うん、一杯いただこうかな」

「私はいつもの焼酎のお湯割りを頼むよ」

松太郎と大地は杯を交わした。

「あー、おいしいいー！」

大地は、ビールをグツと飲み、満足した表情で言った。

「さあ、たくさん食べなさい。長野ではカニはあまり食べる機会がないだろうからね」

「そうだね。長野には海がないし、うちではまず出てこないからね」

大地は笑いながら答えた。

「いただき…」と言いかけて、大地は思い出した。

「食事の前には、三首のお歌だよね」

「そうそう、覚えていたな」

「では。天の恩……」

三人は、手をあわせて二代さまの『三首のお歌』を拝誦はいしやうした。（三首のお歌については、本誌昨年の五月号参照）

「いただきます」大地にとつては、久しぶりのカニであった。ハサミにも足にも身がしつかりつまった立派な松葉蟹かにだ。

「うわあ、おいしそう」

カニ鍋となると身をとる作業に忙しく、会話が止まることが常である。大地も食べることに夢中になっていた。

「ところで大地…」と、松太郎が話しかけてきた。

「さっき話した神約のことだがなあ…」と、言いかけた松太郎の言葉を、ともがさえぎった。

「もう、おじいさん。神さまの話はそのくらいにして、ちあきや司つかきのことを聞かせてもらいましょうよ」

大地も、カニをほおぼりながら、無言で頷うなずいた。

ちあきと司というのは、大地の妹弟きょうだいのことで、ちあきが十九歳の専門学校生、司が高校二年生である。松太郎とともにっては、かわいい孫たちである。

「そうだなあ」

松太郎は少し残念そうに答えた。

「二人とも元気だよ。ちあきは、美容師を目指してがんばっているし、司は、勉強よりも毎日バスケットの部活で忙しくしてるよ」

「そうかい。元気が何よりだね。二人とも大きくなったらうねえ」

「あ、そうだ」と、大地は携帯電話をとり出し、妹弟と京子がいっしょに映った写真を画面に出して、ともに手渡した。

携帯を手にしたともは、画面を遠ざけて見づらそうにしている。

「おばあちゃん、めがねだね。どこにあるの」

「悪いね、テレビの横なんだよ」

大地はテレビ台の横に置いてあった老眼鏡をとり、ともに渡した。

「ああ、いい写真だね。二人とも大きくなって。道でバツタリ会ったらすぐにはわからないかもしれないねえ」

「とくに司は育ち盛りで、バスケをやってるからかなあ、身長もだいぶ伸びたよ」

ともは、うれしそうな顔をしながら、携帯を松太郎に渡した。松太郎も写真を見ながら笑みを浮かべた。神さまの話をしてきた真剣な表情と違い、好好爺こうこうやの顔になっていた。

その夜は、大地の家族の話題に花が咲き、楽しい夕食の団らんが続いた。

食事も終わりがけたころ、松太郎が話をかえた。

「そういえば、お母さんから連絡があつたんだけど、大地に祖霊さまへの玉串を持たせたと行ってたがなあ」

「あつ、そうそう。預かってきたんだ。かばんに入れてあるから、持って来ようか？」

「いや、あるならいいんだ。明日、持って行ったらいいからな」

「うん、わかった。で、どこへ行ったらいいの？」

「みろく殿の中にある霊祭部というところだよ」

「みろく殿って、夕べの節分大祭で、焚たき火のうしろにあつたあの大きな建物だよね」

「そうだ。今は、亡くなった人たちの神霊みたまをお祀りまつしてあるところなんだ。いっしょに行くから心配しなくていいよ」

「うん、ありがとう」

「大地、もう食べなくてもいいのかい」

ともが聞いた。

「おばあちゃん、もうおなかいっぱいだよ。ごちそうさまでした」

「そうかい。じゃあ、お茶を持ってくるね」

孫と祖父母の和やかなひとときが続いた。気がつくと窓の外には、小雪が舞い始めていた。

翌朝、大地はふだんより少し早く目がさめた。カーテンを開けると、外はうつすらと雪化粧にかわっていた。長野生まれの大地は、寒さには強いと思っていたが、綾部の寒さは長野のそれとは少し違う気がした。

大地はリビングの松太郎と、台所に立っていたともに朝のあいさつをし、洗面をすませた。その後、松太郎について朝拝に参拝し、終わって朝食をとった。ともが作ったみそ汁が、格別にうまかった。

朝食後しばらくしてから、松太郎は大地といっしょに、軽トラで梅松苑へ向かった。畑や家々の屋根にはまだ雪が残っていたが、道路の雪はすっかり溶けていた。

午前九時すぎ、梅松苑の駐車場に車を止め、二人はみろく殿へ向かった。

苑内では、節分大祭で使われたテントやテーブル、イスなどの撤去作業のためか、大勢の人がかしましく働いていた。

みろく殿前のつくばいを使い、殿内に入った。

「広いなあ」

大地は久しぶりに入ったみろく殿の広さに、どこかなつかしさを感じていた。

右手のドアから係の人が出て来て、大麻でお祓いをしてくれた。

「梅木さん、ようこそ」

「おはようございます、今日は孫を連れて来たよ」

「そうですか。さあ、寒いでしょうから、こちらへどうぞ」

二人は案内のままに、右手にある霊祭部へ入った。係の女性が笑顔で迎えてくれた。「今日は、年祭の申し込みをしたんです。これがいただいた霊祭通知ハガキだが……」

女性は、ハガキを受け取り、

「はい、わかりました。雨宮香あまみやかおるさんの二十年祭ですね」と確認した。

「えっ、雨宮？」

大地は、自分と同じ苗字を呼ばれて少し驚いた。松太郎は、

「そうです。この子の次の孫になるはずだったんですが、流産した子なんですよ」

「そういえばお母さんから僕とちあきの間にもう一人弟妹きょうだいがいるって聞いたことがあったよ」

「そう、今年の三月十日で二十年になるんだよ。もし生まれてきてたら成人式だなあ」

松太郎は、祭祀料さいしりょうを差し出した。

「では、祭祀料三千円お預かりします。お玉串はどうなさいますか？」

「大地、預かったお玉串を出しなさい。お母さんは毎年この日に、みろく殿の大神さまと祖霊さまにお玉串をお供えしているんだよ」

「そうだったのか。それで二つあったんだね。はい、これです」

「お預かりします。この日は参拝なさいますか？」

女性の問いに、大地は松太郎の顔を見た。

「私有家内といっしょに参拝するつもりです」

「わかりました。では、ご参拝ということでお受けしました。これはお下がりです」

大地は女性から手渡されたお下がりを受け取りかばんに入れ、松太郎の後について受付を出た。二人はご神前に進み、大神さま、祖霊社、万霊社とお参りした。

「ぼくの兄弟がここにお祀りされているのか」

「そうだよ。この右側の祖霊社に梅木家の子孫・親族家族としてちゃんとお祀りされているんだ」

「梅木家の親族家族？」

大地はまた、疑問がわいてきた。

祖靈それいとは

「おじいちゃん、今の、うからやから」って何なの？ 聞いたことがあるような気がするけど」

大地は早速、松太郎に問いかけた。

「そりゃあ、聞いたことがあるだろう、たった今、祖靈社の前で奏あげた祝詞にあつたからなあ」

「あつ、だからかあ」

「祖靈それいはいし拝詞はいしという祝詞の冒頭が、遠津御祖とつみみおやの神靈かみよよ代々の祖等親族家族おやたちうからやからの靈みたまだからね。この言葉は、それぞれの家の祖靈さま、つまりご先祖さまをまとめて呼んだ言葉なんだよ」

「そうなのか」

「これは三つの単語がくつついているんだよ。最初の遠津御祖とつみみおやの神靈かみよよというのは、その家の一番元の先祖せんぞということ。次が代々の祖等おやたちで、これは遠津御祖とつみみおやの神靈かみよよ以降、一番新しい先祖までの総称。三つ目の大地が聞いた親族家族うからやからの神靈みたまは、親戚縁者しんせきえんじやの神靈みたまということになるんだ。つまり、うからやから」は、親族や家族のことなんだ」

「あ、そういう意味だったのかあ」

「ご先祖さまのことを祖霊さまというから、先祖をお祀りすることを、“祖霊祭祀”、または“みたままつり”というんだ」

「みたままつり」

大地は、松太郎の言葉を繰り返した。

「それぞれの家のご先祖さまを、大本の方式でみろく殿の祖霊社にまつりかえることを “復祭” というんだ」

「復祭？」

「往復の復という字を当てていて、日本の古来からのまつりのあり方にかえすという意味だよ」

「ああ、なるほど」

「じゃあ、ぼくの弟か妹になるはずだった香は、おじいちゃんとの親族として祀られていたということだね」

「そう、梅木家の祖霊として合祀してもらっているんだよ」

「でも、おじいちゃんよりずっと後に生まれるはずだったんだから、おじいちゃんの

先祖じゃないんじゃない？」

「なかなか鋭い質問だなあ」

松太郎は苦笑いしながら、話を続けた。

「まあ、単純に言葉の意味からいうとそう受け取れるが、すでにお祀りしてある人々のことを先祖とも言うんだよ。辞書にもそう書いてあるんだ。だから、香の神霊をお祀りした時点で、わが家の祖霊になったということだ」

大地は黙って二度うなずいた。

「大地のお母さんは兩宮家に嫁いだわけだから、香はおじいちゃんからしたら外孫になるんだ。本来なら、兩宮家でお祀りしたらいいんだけど、おまえのお父さんはまだ大本の信徒ではないし、自宅に神さまも祖霊さまもおまつりしてないから、おじいちゃんが代わりに、かわいい孫をお祀りしたということだ。お前のお母さんもそれを強く望んでいたんだよ」

「そうだったのか。香にとつては、ありがたいことなんだろうね」

「それはそうだよ。子孫のまごころのこもった『みたままつり』は、かならず靈界の祖霊さまに届き、祖霊さまの靈魂の向上につながるんだ」

「へえ〜？ 祖霊さまの靈魂が向上するとうどうなるの？」

「より高い霊界に進むことができるんだよ。それは祖霊にとっては、大きな喜びになるんだ。そしてその喜びは、かならず、この世で生きている子孫にも良い影響をおよぼすことにつながるんだ」

「ということは、ぼくたちがきちんと

「みたままつり」をやるということは、まわりまわって、自分のためにもなるということ？」

「その通りだ」

「じゃあ、大切なことなんだね」

「それから、香の神霊みたまは、祖霊社ごうしで合祀してもらってから、わが家でも祖霊としてお祀りまつりしているんだよ」

「そうだったのかあ。じゃあ、おじいちゃんにお祀りしてもらって、香もきつと喜んでいるんだらうね」

大地は感心した表情で言った。

「ところでおじいちゃん、香という名前は誰がつけたの？」

「大地の両親が相談してつけたんだ。流産した子の場合、性別はわからないから、男

の子でも女の子でも通用する名前にするんだよ」

「なるほど、それで香つていう名前にしたんだね」

「それから、祖霊としての敬称は、流産した子の場合は、児童の児をつけて呼ぶんだ。だから香の場合は、香児と言うんだよ」

「じゃあそれが、仏教でいう戒名みたいなものなの？」

「戒名とはちよつと違つて、生きていた時の氏名のあとに、年齢と性別に応じた敬称が決まっているから、誰でもつけられるし、戒名料みたいな代金も必要ないんだよ」

「そりゃあ、いいね」

「確かここに書いてあつたはずだけど」

と言いながら、松太郎は懐から「おほもとのりと」を取り出して開き、大地に差し出した。

「あつた、あつた。ほら、ここにあるだろう」

「あつ、これかあ」

「三十歳以上で、男性が毘古、女性が毘女。十五歳から二十九歳までが、比古と比女。七歳から二十四歳までが、若子と少女。満六歳以下が、稚子と稚女。流産など男女不明の場合が、児、と書いてあるね」

大地は「おほもとのりと」をもう一度見直して、少し間をおいて口を開いた。

「でも、おじいちゃん。流産児って、そもそも生まれて来られなかったんだから、不幸だよな」

松太郎は、首を小さく横に振りながら答えた。

「人間的にはそう思えるだろうなあ。大地のお母さんは香を流産した時、とても悲しんでいたよ。お父さんもそうだったなあ。でも、香はこの世での修行が、あとちょっとだけ残っていたんだよ。香と因縁のあったお母さんのお腹に宿ったことで、その残っていた修行を終えて、天国に帰って行ったんだよ。だから今は天国で、きつと幸せに暮らしていると思うよ」

「なるほど、そう考えると救われるね。でも、弟だったのかなあ？ 妹だったのかなあ？」

「さあ、それはわからないなあ。ただ、言えることは、弟だったら三十歳くらい、妹だったら二十歳くらいの青年になっていることは間違いないよ」

「えっ、赤ちゃんではないの？」

「赤ちゃんじゃないよ。天国に帰ると、みんなその年齢になるそうさ。聖師さまが『霊

『界物語』の中でそう書いておられるんだ」

「そういうお示しがあるんだね」

大地は少しうれいしい気分になった。

「それから一つ気になっていることがあるんだけど」

「何だい？」

「さつき聞いた祖霊さまの話だと、一軒の家で祀るご先祖さまの数は、ものすごい数になるんじゃないのかなあ？」

「そうだよ。いちいち名前はあげないけど、すべてのご先祖さま、ということになるから相当な数だろうね」

「だよね」

「自分からさかのぼってのご先祖さまの数だけでもすごい人数だよ。たとえば、一代を三十年と考えてみると、三十代前までさかのぼると、およそ九百年前になる。それから今までの先祖の数を累計すると、だいたい二十一億人以上という数になるんだ」

「えーっ、そんなになるの！　びっくりだね」

「そう、大地のご先祖さまも、当然今の数以上のご先祖さまがおられるわけだよ。で、

そのうちの一人でも欠けていたら今の大地は、ここにいない、ということになるだろう」

「なるほど、確かにそうだね。そう言えば、おじいちゃんもその一人だよね」

「おいおい、まあそうだけど、おじいちゃんはまだお前の祖霊じゃないぞ」

「冗談だよ」

大地は笑いながら言った。

「でも、だからこそ、すべてのご先祖さまに感謝しないといけないんだね」

「そういうことだ。大地と霊界の祖霊さまとは、いつもつながっているんだよ」

「何だか責任重大って感じだね」

と言いながら、大地の顔は笑顔になっていた。

靈界と現界の違い

大地は、思いついたように松太郎に訊いた。

「おじいちゃん、僕は今まで“死”ということについてあまり関心がなかったんだけど、考えたら誰でもいずれは死ぬんだよね」

「そうだよ、その人によつて時期は定かでないけど、死ぬ確率は百パーセントなんだ」「なるほど、百パーセントかあ。そうだね。じゃあ、“死”ということに関して今のうちから、ちよつとは勉強しておいた方がいいのかなあ？」

「もちろんそうだとおも。聖師さまは、

『生前に死後の備へのなき人は

死期せまるとき無限の悔あり』

とお歌を詠んでおられるくらいで、自分が死んだらどうなるのか、どこへ行くのか、ということを知っておくことは、とても大切なことなんだよ」

「そうなんだね」

大地は納得したような顔で答えた。

「昔、こんなことがあったんだ」

そう言いながら、松太郎は友人の齋藤真一のことを語り出した。

「彼は四十代の頃、健康診断で胃ガンが見つかり、胃の全摘手術をしたんだ。ヘタをしたら生死に関わることだから、家族や親しい人たちはとても心配したんだ。でも、彼は大本の信仰を持ち、死後の世界についてしっかりした認識と信念を持っていたから、動じることがなかったんだ。立派な態度だった」

「ふ〜ん、すごいね」

「今も元気だけど、彼はいつも楽天的で、手術のあとなんか、『俺、胃を取って、佐藤になっちゃったよ』と、笑い飛ばしていたくらいなんだよ」

「ん??」

「ざいとうからい、(胃)を取ったら、ざとうになるだろう」

「あつ、そういうことか」

大地は苦笑いした。

「まあ、それはさておき、彼が入院した時、同じ病室に彼と同じ病気で入院してきた患者さんがいたんだ。その人は会社を経営する五十代の社長さんだった。ものすごい努力家で、一代で会社を立ち上げ、病気になるまでは、それは元気な人だったらしい。

それまではどんなことでも、自分の力で切り抜けて来た人だった。でも、いざ自分が胃ガンだということがわかり、＼もしかしたら死ぬかもしれない＼と思ったら、とても不安になってしまつて、オロオロしていたそうだ」

「分かるような気がするよ」

「人間、死と隣り合わせになった時、言い知れない不安が襲ってくるものなんだなあ。先のことがまつたくわからないと、心配になるだろう」

「そうだろうね」

「たとえば、大地が就職して会社勤めをするようになったとしよう。そこで急に一人での海外出張を命じられたとする。行き先は、…そうだな…ブータン。さてその時、大地はまず何をするか？」

「えっ、ブータンに海外出張」

大地は驚いた表情になり、腕組みをしながら考えた。

「そうだね。ブータンって聞いたことはあるけど、まったく知らないから、まず、ブータンという国がどこにあるのか、どんな国なのか調べるだろうね」

「そうだろうなあ。会社の先輩に訊いたり、ガイドブックを手に入れていろいろと調

べるだろう。写真を見、説明を読んで、ブータンの気候風土や言語、通貨の単位、民族性や習慣なんかを事前に知っておかないと不安だろうなあ」

「そうそう。それに、ブータンまでどうやって行ったらいいのか。現地に着いたらどうしたらいいのか。知らなかったら安心して行けないよね。まあでも、初めて行くとなると、事前に調べておいても不安があると思うよ」

「そうだな。海外旅行でさえも、目的地のことが分からないと不安なものだ。ましてや死後の世界、“あの世”ともなると不安を通り越して、恐怖に思えるかもしれないなあ」「そうだよ。あの世”に行つて帰つて来た人もいないし、ガイドブックもないからね」「そう、普通は “あの世” に行つてしまつたら帰つて来ることはできないんだ。でも、神さまのお許しがあつて、“あの世” の一部を伝えるために、行つて帰つて来た人がいるんだよ」

「あつ、分かつた。臨死体験をした人でしょう」

大地は自信ありげに答えた。

「ん、確かに臨死体験りんしたいけんをした人が、それまでと体験後では、人生に対する考え方が大きく変わると言われているなあ。でも、臨死体験は正確に言うと “あの世” に入ると一歩手前なんだよ。普通の人は、完全に “あの世” に入ってしまったら、もう戻るこ

とはできないんだ」

「そうなのかあ」

「でも、あの世へ行って帰ってきた人がいるんだ」

「誰？」

「聖師さまだ」

大地はしつかり頷いた。

「聖師さまは、神さまからの使命をただかかれて、あの世を探検され、その時に見聞されたものを、『霊界物語』として、発表されたんだ」

「じゃあ、『霊界物語』が、あの世のガイドブックなんだね」

「そうなんだが、実は『霊界物語』の『霊界』というのは、あの世だけのことじゃないんだ。『霊妙な世界』ということ、あの世とこの世、過去と未来を含めた世界のことだと、聖師さまはおっしゃっているんだ」

「なるほど」

「でも、聖師さまは『霊界物語』の中で、あの世のことを詳しく示しておられるんだ。だから、今からはあの世のことを『霊界』として説明しようかな」

「うん、その方が分かりやすくていいね」

大地は頷うなずき、質問を続けた。

「人間は死んだら何も残らない、無になるから霊界は信じないという人もいるよ」

「そうだな。確かにそういう人もいる。目に見えないものは信じないという人だろうが、目に見えなくても存在するものはいくらでもあるだろう。霊界の存在を信じる、信じないに関わらず、あるものはあるんだ。臨死体験をした人は、理屈抜きで霊界の存在を確信するように、信じないと思っている人は、年齢を重ねて何らかの霊的体験や霊界を感じるチャンスがあれば、その思いは変わると思うよ。ところで大地はどうなんだ？」

「まだよく分からないけど、あるんだろうなあ、っていう感じかな」

「まあ今はそれでいい。これから少しずつ理解していけばいいな」

松太郎は優しいまなざしで大地の顔を見た。

「ところでおじいちゃん、この僕らが暮らしている現実の世界と、霊界との一番の違いは何？」

「いい質問だ」

松太郎の目が輝いた。

「この現界では、人間は肉体を持っている。肉体はオギヤーと生まれてから死ぬまで同じものだ。あの肉体がカッコイイから交換したい、と思ってもそれはできない。もちろん肉体は年齢とともに成長していき、ある程度になると今度は老化していく。実は、この肉体は人間の本体である、魂の入れ物なんだ。しかもこの入れ物は言葉をしゃべることができる。言葉をしゃべっているのは、肉体が持つ口であり、声帯なんだ」
「うん、そうだよね」

「その言葉は、人間の本体である魂、心で思ったことを口に出して話すわけだな」
「そうだよ」

「でも、人間は心で思ったことをいつもそのまましゃべるのかな？」
「そうじゃないの？」

大地は不思議そうな顔をした。

「じゃあ大地、今、おじいちゃんが話していることが、大地にとって興味がないつまらない話だったらどうだろう。おもしろいねえ、なんて言うのかな？」

「まあ、おもしろくなくても一応気を使ってそう言うかも」

「だろう。心に浮かんだことをストレートに言ったらマズイなあと思ったら、別の言葉に置き換えてしゃべってしまうことがあるだろう」

「そう言われたらそうだね」

「それは肉体があるからなんだ。魂が肉体から離れ、霊界に行ったら、人は思ったことをそのまま話してしまうんだよ。つまりうそや偽りは通用しないのが霊界なんだ」

「え、それは厳しいなあ」

大地はちよつと驚いた表情で松太郎から視線をそらした。

三途さんずの川と中有ちゆううかい界

「ねえ、おじいちゃん」

大地は、視線をもどし、松太郎の顔を見ながら聞いた。

「さつき、臨死体験をした人は、あの

世”に入る手前までしか行つてないと言つてたよね」

「ああ」

「ということは、霊界には行つてないということだよ」

「まあ、そういうことだなあ。死後の世界の入り口の一步手前まで行つて戻つてきた体験が、臨死体験といわれているものなんだ。多くの場合、お花畑や、とてもきれいな景色の中を歩いていたり、大きな川のほとりまで行つて、後ろの方から誰かに呼ばれて振り返ると目が覚めた、というケースが多いんだよなあ」

「何かの本で読んだことがあるけど、病院のベッドで横たわっている自分の姿を上から見ていた、という話もあったよ」

「そういう話も聞くなあ。変わったところだと、こんな話もあるんだ」

「何、なに？」

「その人は気がつくといつのままにか、高層ビル街にいた。そこをフラフラと歩いていて、ふとあるビルに入っていた。入り口を進むと受付の女性がいたので、あいさつをすると、名前を聞かれ、パソコンで照合され、『あなたはまだここへは入れませんよ』と言われた。それで仕方なく街中をしばらくトボトボと歩いていると、飲屋街があつてそちの方へ進んでいった。そこで目に入った赤ちようちんのかかった一軒の居酒屋に入った。そこで、先客と仲良くなつてお酒を飲んでいたら、いつの間にか気持ちよくなつて寝てしまった。目が覚めると、病院のベッドだったそうさ。この人は交通事故にあつて、九死に一生を得た人だったんだ」

「へえ、すごいね」

大地は感心した表情で言った。

「いずれにしてもそういう体験をした人は、息を吹き返したんだから、霊界、死後の世界には入っていないわけで、はるか遠くの方から、霊界の一部を見てきたということだろうな」

「一線を越えてなかったということだね」

「そう、聖師さまは、この世と死後の世界との一線、境目には、大きな川が流れていて、それを『三途の川』^{さんず}というとおっしゃっているんだ」

「三途の川？」

「そう、この三途の川を渡ってしまふと、もうこの世には戻ってこられないそうさ。三途の川の『途』は、みち、みちすじという意味があつて、つまり三途の川は、三つの道筋ということなんだ」

「えつ、どういふこと」

「三途の川は、その前に立つと、人それぞれ見え方が違うそうさ」

「激しい流れであつたり、弱い流れに見えたり、とてもきれいで穏やかに流れているように見える人もあるそうさ」

「じゃあ、もし死んでその三途の川の前に来た時に、その見え方によつて、行き先も決まってくるということなの？」

「そういうことらしいなあ」

「ということは、きれいな川に見えたら、天国に行けるのかなあ？」

「そうだろうなあ。それから、もう一つ行き先が分かることがあるんだよ」

「え、まだあるの」

「三途の川の渡し場には、川を守っている『川守』がいるそうだな。まあキーパーだな。そして、その川守は、川を渡る人の生前の行いによって、美人になったり、恐い鬼婆の姿になったりするんだ」

「へ〜」

「相手が悪人だと川守は鬼婆になって、着ていた服をはがすんだ」

「あらら」

「善人の場合だと、川守は美人になってやさしい言葉をかけながら、きれいな服に着替えさせてくれるそうだよ」

「じゃあ、川の前で美人に会えたらラッキーってことだね」

「いや、三途の川では『運』は通用しないよ。真実が明らかになるから、そこへ来た時点で、すべては決まっていることなんだ」

「そうか、できれば、美人に着替えさせてもらえとうれしいけどなあ」

大地は笑いながら言った。松太郎も笑みを浮かべながら、言葉を継いだ。

「おじいちゃんも、そう願っているけど、そのためには、生きている間の心がけや行いが大事なんだ」

「そういうことなんだね」

「で、三途の川を渡った後の死後の世界だがな、実は、ここも大きく分けると、三つあるんだ」

「三つ？」

「簡単に言うと、天国と地獄とその中間の世界なんだよ」

「天国と地獄は聞いたことあるけど、中間の世界というのは、何？」

「いろいろな呼び方があるけど、大本では、中間に有る世界ということで、〃中有界〃と書いて、〃ちゅううかい〃と呼んでゐるんだ」

「ちゅううかい？」

「中有界というのは、人が死んでから最初に行くところで、霊界と現界が接する場所、霊界への入り口ともいえるところなんだ。さっき言った臨死体験で、川やお花畑を見たと言われるのは、中有界の入り口の様子ということになるな」

「じゃあ、そこを通って、天国や地獄に行くわけだね。もう少しぼくに分かるように、おじいちゃんの得意な例え話で教えてくれない？」

「そうだなあ」

松太郎は首を少しうつむき、しばらく考えてから話し出した。

「たとえば、天国を温水プールだとしてよう」

「温水プールかあ」

「プールに行くともまず、受付で料金を払うだろう」

「受付にいるのは、鬼婆、それとも美人？」

「天国に行くんだから、美人さ」

「あ、そうか。良かった」

大地はニコツとした。

「そして、ロッカーキーをもらって更衣室に向かうだろ」

「うん、ロッカーキーには、たいてい番号がついているから、いくつか更衣室があっても、案内板を見て行けば、目的の場所は分かるよね」

「そう、指定されたロッカーまでたどり着いたら、その前で、靴を脱ぎ、時計やアクセサリーをはずし、服を脱いで水着に着替えるな。そして、決められたスイミングキヤップをかぶり、ゴーグルを持ち、バスタオルを持って更衣室を出る。そこからプールサイドに行くまでに、シャワーを浴び、プールサイドでは柔軟体操なんかをして、プールに入ってもいいように、いろいろと準備をするだろう」

「そうだね」

「そしてようやくプールに入れるわけだ。プールの水は温水だから冷たくなくて、気持ちよく水泳ができるわけだな」

「うん」

「この受付という“三途の川”を過ぎてから、“天国”という温水プールに入るまでの、更衣室やシャワー、体操などのいろいろな準備の場所と時間が“中有界”ということになるんだ」

「なるほど！」

大地はうなずいた。

「じゃあ、中有界にいる時間はあまり長くなくてすむようだね」

「いや、プールに入るまでの準備と違って、本当に天国に入る前の準備には、少し時間がかかるようだね」

「それは、何時間くらい？ 一日？ 一週間？」

「これは決まっておらず、平均五十日くらいと言われているんだよ」

「五十日もあるの」

「そう。ただし、中有界を含めた靈界には、時計を見ながら計るような時間の概念はなくて、『あゝ、もう五十日たったかなあ』という感覚的な時間なんだ。そしてそれも生前の行いによつて長短があるんだよ」

「じゃあ、五十日以上かかる人もいるということなの？」

「最高は、三十年といわれている」

「えゝつ、そりゃあまた長いなあ」

「短い人は、数日だとも教えられているんだ」

「ということは、準備に時間がかからない方がいいような気がするから、良い行いをした人は、短い期間で中有界を出るんだろうね」

「そういうことだろうな。あ、それから、人が死んで中有界に入ったら、魂の状態になるんだが、それを“精靈”というんだ」

「精靈？」

「人の魂は、動物などの魂と違って、とても複雑精巧にできているので、**精・妙・な・靈**ということから、精靈というんだよ」

「じゃあ、人は精靈となつて、中有界で五十日過ごすんだね」

大地は、確かめるように言つてうなずいた。

不老不死の妙薬

「ところで大地、今、いくつだったかなあ？」

松太郎は、唐突に大地の年齢を聞いた。

「二十二歳だけど」

大地は、ポカンとした表情で答えた。

「二十二歳かあ、若いなあ。じゃあ、大地は何歳くらいまで生きたいかな？」

「えっ。ん、そんなの考えたことなかったけど」

と首をひねったあと、笑いながら胸を張って言った。

「死ぬまで生きたいです」

その答えに、松太郎は笑みを浮かべながら言葉を返した。

「おいおい、冗談ぬきで答えてくれないか」

「ごめん、ごめん。そうだねえ」

大地はしばらく考えてから答えた。

「具体的な年齢というよりも、生きてて良かったと思えるまでかな」

「ほおっ、それはいい答えだなあ」

松太郎は感心した面持ちで言った。

「ともあれ、人は皆、いずれは死ぬわけだ。おじいちゃんは今七十二歳だから、あと十年や二十年したら、霊界へ行かなくてはならないだろうなあ。今では、七十歳を過ぎることは、めずらしいことじゃないけど、昔は、六十歳まで生きられたら御の字だったわけだよ」

「還暦までということだね」

「そう、六十年で生まれた年の干支えと、暦じよみに還るといふことで、数え年六十一歳を還暦かえと言うんだ。昔は、赤いチャンチャンコを着て、『還暦』のお祝いをしたくらいなんだ。今は六十歳というと、まだまだ働ける年齢だな。それでも、官公庁や多くの企業では、定年のところも多いがね」

「そうなんだ」

「昔の戦乱の世の中では、長生きする人はめずらしかつたんだよ。だから長生きしたために、不老不死の妙薬めいやくを探し求めた、という話がいくつもあるんだ。山中に住む仙人がその不老長寿の薬を持っているなどと想像されたものなんだ」

「ふう〜ん」

「あの有名な秦しんの始皇帝しこうていは徐福じよふくという家来に、不老不死の妙薬を探すよう命じたんだ。徐福は何千という供を連れて船を出し、日本に渡ってきたそうさ。そして各地をまわり、長寿の村にたどり着き、妙薬を手に入れたんだ」

「へえ、不老不死の妙薬が日本にあったの？」

「まあ、それは海藻であつたとか、ヒジキであつたとかいうことらしいがなあ」

「なあ〜んだ」

「そうした徐福伝説は、綾部の北の丹後半島の伊根町や、日本の各地にあるんだよ。まあ、皮肉なことに、徐福が秦を出発した翌年、始皇帝は亡くなつていたし、徐福も中国へ帰国することはなかつたそうさ」

「あつたら、残念でした、ということだね」

「もちろん、今の世の中に、肉体の不老不死の妙薬があるはずはないんだよ」

「だよね」

「それに、あつたらたいへんだ。もし、それを大勢の人が飲んで、私は今、三百歳です、私はもう五百歳です、なんていうのもどうかと思うなあ」

「そうだよね」

「肉体の『不老不死』はあるはずもないことは誰でもわかることだ。実はなあ、本当の『不老不死』は、精霊のことなんだよ。ただ多くの人はこれに気づいていないだけなんだよ」

「精霊は、永遠に死なないということなの？」

「そうなんだ。このこと知って、この世を喜びをもつて生きていくことが大切で、その鍵となる『み教え』こそが、実は『不老不死の妙薬』であると言えるんだよ」

「だから、霊界のことを詳しく知っておくということが大切なんだね」

「そういうことだ」

松太郎は、大きく頷き、話を続けた。

「大地、人の死というのは悲しいものだよ。特に、身近な人が、不慮の事故や災害、事件などに巻き込まれて亡くなったときなどは、その悲しみはより深いものがあるんだよ」

「僕はまだその経験がないからわからないけど、きっとそうだろうね」

「でもなあ、もしこの世に『死』というものがなく、誰も死ぬことなく、人が増え続けたら、この世の中はどうなるかなあ？」

「そりゃあ、大変なことだよ。人口が増え続けたら、環境問題や食料問題は今の比ではないし、しまいには、地球がパンクしてしまうんじゃないかなあ」

「そうだなあ。そうした意味で、聖師さまは、『死は神さまの慈愛である』とさえ説いておられるんだ。もちろんそれは、肉体を主にしたことではなく、あくまでも靈魂を中心に考えてのことだがなあ」

松太郎は少し間を置いて、大地に質問した。

「死ぬということは怖いことだと思っかな？」

「うん、今の僕にとっては怖いものだね」

「そうだな、それでいいんだ」

「いいの？」

「もちろん。神さまは、人の“死”というものに対して、“恐怖心”を与えておられるんだ。これも神さまの愛なんだよ。もし死が怖くなかったら、人は簡単に命を落としてしまいかねないからなあ」

「あつ、なるほど」

「もつとも最近では、自殺者が増えているそうだ。年間三万人以上の人が自殺していて、

交通事故で亡くなる人よりもはるかに多いらしいなあ」

「悲しいことだね」

「そうなんだ。自らの命を絶つことは、神さまから見たら最も重い罪になって、霊界に帰ってから、たいへんな苦勞をしなくてはならないそうだよ。現界での苦痛以上のものが待っているんだから、決して死んだら楽になるのではなく、よけいに苦しくなるということも知っておかないといけないんだよ」

「それは大変なことだね」

「霊界は、意志・想念という思いの世界だから、自殺した時の苦しい思いをそのまま持っていていき、それに縛られてしまうんだよ。肉体がない分、その思いがより鮮明になつてきて、よけいに苦しい思いが強くなるんだ」

「自殺は自分の魂のためにも、やっではいけないことなんだね」

と言つて、大地は頷きながら松太郎の話に耳を傾けていた。

「梅木さん」

後ろから霊祭部の女性が声をかけた。

「そこでお話しされていると、寒いでしょう。よかつたらあちらへどうぞ」

と、みろく殿南側の小部屋を指差した。

「あつ、ありがとう。じゃあ、あっちへ行こうか」

松太郎と大地は、ゆっくり立ち上がり、万霊社の前のストーブのそばから、小部屋に向かつて歩きだした。先に歩いていた女性が、「部屋は暖かくなっていますし、今、お茶を入れますね」と振り返って言いながら、受付の方へ進んでいった。

二人は、小部屋の中に入り、ガラス戸越しに見える金竜海に目をやった。神苑の樹々には、まだうっすらと雪が残り、朝の日をあびて融けた水滴が金竜海に落ち、水面にいくつもの波紋が広がっていた。

「お茶をどうぞ」

くだんの女性がお盆に急須と湯呑^{ゆづ}みを乗せて入ってきた。女性は手際よく長机の上に湯呑みを置き、急須からお茶を注いだ。

「いただきますものですけど、よかつたらどうぞ」と茶菓子を添えた。

「いや、ありがとうございます。遠慮なくいただきます」

「どうぞ、ごゆっくり」

女性が部屋から出たあと、二人は長机に向かい合つて座り、同時に湯呑みを手に取り、お茶を飲んだ。

「あゝ、おいしい」

大地はホツとした気分になった。

「きれいな神苑の景色を見ながらいただくお茶は、格別だなあ」

松太郎も笑顔になっていた。

「おじいちゃん」

大地が松太郎に聞いた。

「亡くなった人の精霊が中有界ちゆううかいに入つて、五十日たったら、それぞれに決められたところへ行くことだったけど、みんな天国に行くことになるの？」

「みんな行くんだよ、と言いたいところだけど、天国へ行けない精霊もあるんだ」

「その精霊はどこへ行くの」

「地獄と呼ばれるところだなあ」

「やっぱり、神さまは地獄もつくっておられたんだね」

「いや、そうじゃないんだ」

「えっ、そうじゃないって、どういうこと？」

大地はまた不思議そうな顔をした。

自分で造つてしまふ地獄

松太郎は、再び湯呑みをゆっくりと口に運び、一口お茶を飲んでから話し出した。

「本来神さまは、霊界には天国だけあればいいと望んでおられると、おじいちゃんはどうなんだ。でもなあ、霊界に帰った精霊の中には、どうも『天国は居心地が悪い』と感じる精霊がいるようなんだ」

「へえ〜」

「この世でも、本当は天国的な雰囲気が一番好まれるはずなんだが、人によっては、取り巻く環境や、本人の心がけの悪さで、天国的なところよりも、どちらかという地獄的な雰囲気のところの方がいいという人もあるんだ。もっともそんな人にとっては、そこが天国なんだろうけどなあ」

「へえ〜、そうなの？」

「極端な例かもしれないが、少し前によくテレビで報道されていた『ゴミ屋敷』の話題があっただろう」

「全体がゴミで覆われている家だね。けっこうたくさんあるみたいだね」

「そう、おじいちゃんなんか、よくまあ、あんなところで生活できるなあ、と思っ

たけど、住んでいる人は平気なんだなあ。テレビでは臭いは伝わらないけど、きつと悪臭もあるだろうし、周囲の人たちにも大きな迷惑を掛けているはずだ。でも本人は知らんフリで、悪びれた様子もなかっただろう」

「僕の部屋もけっこう散らかっているけど、あれは、すごいよね。そこで生活しているということが、僕も信じられなかったなあ」

「まあ、そう思うのが普通だろうなあ。でも、こんな極端な話でなくても、たとえば、きれいに掃除されて清められたお茶室でお抹茶をいただくより、タバコの煙が立ちこめた薄暗い飲み屋で酒を飲む方がいいという人もいるだろう。そういう人にとっては、飲み屋が天国なんだよ」

大地は、首をひねりながら聞いた。

「それは、好き嫌いの問題じゃないの？」

「そうともいえるけど、好き嫌いということは、興味があるかないかの問題で、人間は、興味のないものだと、たとえ目の前であっても気にも留めないものなんだよ」

「そんなもんかなあ」

松太郎は、湯呑みを机の上に置き、ちよつと考えてから話を続けた。

「今朝、家からここまで来る間に、いろんな景色が目に入ってきただろう」

「そうだね。きれいな景色だったよ」

「でも、おじいちゃんと大地の記憶に残っている景色や物は、必ずしも同じじゃないと思うんだ」

「それはそうだと思うよ」

「たとえば、アマチュア無線のアンテナが屋根の上に立っている家が何軒かあったけど、たぶん、大地にはまったく目に入っていないはずだなあ」

「エエツ、アマチュア無線のアンテナ？僕、まったくわからないよ。第一、どんなものがアマチュア無線のアンテナなのか知らないしね」

「そうだろう。今は携帯電話が普及したから、アマチュア無線はあまり流行はやらなくなつたけどなあ。おじいちゃんは、若い時に興味があつて少しやつていたから、今でもアンテナが立っているという目が行ってしまうんだよ。でも、そんなものに興味もない大地にとつては、意識したこともないだろうし、景色として目に入つてこないのは当たり前なことなんだよ」

「そりゃあ、そうだよね」

「これと似たようなことが、霊界に行ったときにあるんだよ」

「あつ、わかつた。中有界ちゆううかいから地獄に行くときのことだね」

大地は、頷うなずきながら言った。

「そう、察しがいいなあ。中有界での滞在期間が過ぎて、次の世界に行くとき、地獄への入り口は、そこに入るべき精霊のためにだけ開かれているんだ。天国に行くべき精霊には、地獄の入り口はまったく見えないんだよ」

「おじいちゃん、それはどんな入り口なの？」

「何でも岩の裂さけ目のような入り口らしいなあ。なんだか薄暗くて、すすけた蜂の巣のようにも見えるそうだ。聖師さまが『霊界物語』の中で書いておられるのは、その入り口を入ると、道が斜め下に向かつていて、だんだんと暗い深い穴に入っていくようになっているんだ。先に進むとまたいくつかの入り口があつて、その入り口からは、鼻が曲がるような不快な悪臭が漂ってくるらしい。聖師さまは、まゆげ眉毛が枯かれるような感じ」と表現されているから、よっぽどの悪臭なんだろうなあ」

「想像できないくらい臭いってことかなあ」

大地は、眉をひそめながら言った。

「ところが、地獄に籍をおくような精霊は、その暗闇や悪臭が、この上なく好きなんだそうだ」

「ゴミ屋敷に住んで何ともないと思える人みたいだね」

「そう、精霊は中有界を出ると、その身魂に応じた場所に自分から好んで進んでいくことになるんだ。地獄へ行くべき精霊の前には行くべき入り口が開き、進むべき道が決まってくるということなんだよ。そのことを聖師さまはわかりやすいお歌で教えておられるんだ」

「どんなお歌？」

松太郎は、次の道歌を大地に伝えた。

ことさらに神かみは地獄ぢじくを造つくらねど

己おのが造つくりておのが行ゆくなり

「なるほど、そういうことか。地獄というのは、自分自身で造り出すんだね」

「そういうことだなあ」

「じゃあ、死んで中有界を卒業した時に、地獄の入り口が見えないように、この世に

いる時から努力しないとイケないね」

「そうだ、その心がけが大切だなあ」

松太郎は、大地の言葉に笑いながら答えた。

その時、大地はフト気づいたように、真剣な表情で松太郎に質問した。

「おじいちゃん、心がけはいいんだけど、実際にはこの世で、どんなことに注意したらいいの？」

松太郎は、大地の質問に少し驚いたような面持ちで、言葉を継いだ。

「そうだなあ、それにはもう少し地獄のことを知っておく必要があるかもしれないなあ」

「地獄のことはあまり詳しく知りたくないけど、必要最小限度で教えてもらいたいなあ」

「よしよし、じゃあ簡単に言おう」

「お願いします」

「地獄は、別の言葉で、根の国・底の国、とも言うんだよ」

「根の国・底の国？」

大地は松太郎の言葉を繰り返した。

「つまり地獄界は、大きく分けると、根の国と底の国という二つの領域にわかれていて、地獄に落ちるべき精霊は、その魂に応じた方へ行くんだ」

「その二つはどちらがうの？」

「根の国というのは、虚偽の世界。底の国は悪欲の世界と教えられているんだ」

「虚偽と悪欲？」

「そう、虚偽と悪欲」

大地は、考えながら言った。

「おじいちゃん、虚偽というのは、ウソやゴマカシということだよ。つまり、ウソをついて、人をだましたりすることだね」

「そうだな。そして、悪欲は、悪い欲。つまり自分のための欲、私利私欲、エゴ、『われよし』ということなんだろうなあ」

「そういうことかあ」

大地は、腕組みをしてしばらく考えて、納得したように言った。

「ということは、地獄に行く資格を作らないためには、私利私欲のために、ウソやゴマカシで人をだましたり、傷つけたりしないこと。『われよし』の精神にならないとい

うことだね」

「そういうことだ」

「でも、口で言うのは簡単だけど、実践するとなると、しっかり意識して努力しないといけないんだろうなあ」

松太郎は、大地の言葉を聞いて、うれしそうに大きく頷き、目線を外の金竜海に向けた。そして、一つ息をはいてから、聖師さまのお歌を口ずさんだ。

悪と虚偽このむ霊魂は忽ちに

地獄つくりてひとり落ちゆく

恐るべきものは身魂の汚れなり

根底の国へおのづから行く

「おじいちゃんは、よく歌を覚えているねえ。感心するなあ。僕も覚えておこうかなあ」
大地はそう言いながら、これまで聞いた地獄に関する三首の歌を、松太郎から繰り返し教えてもらった。

しばらくして、大地は、独り言のようにつぶやいた。

「根の国と底の国では、どっちが罪深いのかなあ？」

魔王とサタン

「いい質問だなあ。大地自身は、根の国と底の国では、どっちが罪深いと思うかな？」

松太郎は、逆に大地に聴いてみた。それに対し大地は、首をかしながら答えた。

「霊界物語では地獄のことを、根の国・底の国って言うんでしょ。だったら、根っこの底って感じだから、『底の国』の方が悪いんじゃないのかなあ」

「そうだなあ、おじいちゃんも最初は大地と同じように思ってたなあ」

「ええ〜。ということは、反対なの？」

「ん〜、どうもそのようだなあ」

松太郎は一つせき払いをして、話を続けた。

「大地、魔王とかサタンという名前を知ってるかな？」

「魔王、サタン？」

「そう、魔王とサタン」

「どっかで聞いたなあ」

大地は少し考えて、思いついたように答えた。

「あつ、そうだ！ 『ドラゴンボールZ』で出てきたなあ」

「ドラゴンボール……??？」

「そう、人気アニメのドラゴンボールZだよ」

「アニメ？」

「最初は、週刊少年ジャンプという漫画雑誌で連載されてたんだ。それがすごい人気で、テレビアニメにもなったんだよ。平均20%の高視聴率で、最近も再放送されていたし、海外でも人気で、吹き替え版になっていくつかの国で放映されたらしいよ。そうそう、実写版のハリウッド映画にもなったくらいだからね」

「そうなのか？」

「その登場人物の中に、ピッコロ大魔王とミスター・サタンというのがいたよ。ピッコロ大魔王は、神さまの悪の心が分離してできた存在で、世界を征服しようとしたんだ。ストーリーの中では、その生まれ変わりのピッコロが有名だけどね」

「……………」

「ミスター・サタンは、ハッターと強運のおもしろいおっちゃんキャラクターだよ。でも、おじいちゃんもドラゴンボールを知ってるんだね。若いなあ」

「あつ、いやいや、そうじゃないんだがなあ」

「あれ、違うの」

「そのアニメにも出てくるかもしれないけど、たぶんそれは聖書から名前をとったんだろうなあ」

「なんだ、そうなのか」

「実は霊界物語も、一般の人がわかりやすいように、聖師さまは、仏教用語やキリスト教の言葉、他宗の用語もたくさん使われているんだ」

「なるほど」

「それで聖師さまは、根の国と底の国の説明の中で、根の国を“魔王”、底の国を“サタン”と書いておられるんだ。魔王とサタンは、一般では同じような意味に解釈できるようになんだが、霊界物語では、きちんと使い分けてあつてなあ」

「へえ、そうなの。じゃあ、虚偽の世界である根の国が魔王で、悪慾の世界である底の国がサタンということだね」

「そう、そういうことだ。それで、魔王とサタンを比べて、罪悪の違いをお示しになっている一節があるんだ」

「どんなお示し？」

「魔王というのは、より背後、深いところにある地獄で、そこに住んでいるのを凶鬼きょうき

とって、最も凶悪がはなはだしいといわれている。そして、その前面にある地獄がサタンといわれ、凶霊きょうれいが住んでいて、魔王に比べるとまだましなんだとね」

「なるほど、魔王の方がサタンより悪いんだ。ドラゴンボールZといっしょだね」

「そうなのかい」

「まあ、比べるのは悪いけど、そんな感じだね」

「ともかく、虚偽と悪欲を比べた場合、虚偽の方が罪が深いということだ。つまり、ウソ、偽りは最も重い罪になるということをお示しになっているんだ」

「ウソやゴマカシで人をだましたりすることは、かなりいけないことなんだね。ということは、詐欺師の罪は重いんだなあ」

大地はうなずきながら言った。

「弱みにつけ込んで人をだます霊感商法や悪徳商法、お年寄りに被害の多い振り込めサギなんかはとんでもない罪で、そんなことをして人をだました人間は、死んだらとっても苦しい思いをしないとイケないんだらうなあ。恐いことだぞ」

「でもおじいちゃん、人生を送る中で、まったくウソをついたことがないという人は、まあ、いないと思わない？ 時と場合によっては、仕方なくウソを言わないといけないことだってあるよね」

「そうだなあ、この世では、そんな場合もあるなあ」

「たとえば、ガンの告知なんてそうだよね」

「そうだな。ガンになった人のことを真剣に考え、心からの思いやりで、どうしても本当の病名を言わない方がいいと判断して、ウソをつかないといけない場合もあるだろなあ。でもそんな時は、自分のためのウソでなく、その人のためのウソで、心に真^まがあるんだよ。嘘も方便、ということわざもあるしなあ」

「そうだね」

「そしてそこには、必ず愛があるはずなんだよ。しかもその愛は、『愛悪』でなく、『愛善』の愛だから、神さまも許してくださいさるんじゃないかなあ」

大地は、松太郎が言った聞き慣れない言葉に反応した。

「愛悪？ 愛善？」

「愛悪というのは、利己的な愛、自分のための愛ということだ。その反対が、人のための愛でそれを愛善というんだよ」

「ということは、底の国・サタンの悪徳の世界というのは、愛悪の世界ということになるのかなあ？」

大地は独り言のように言った。松太郎は、大地の言葉を聞いて、話を継いだ。

「その通りだよ。まさに底の国は、愛悪の世界なんだよ」

「じゃあ、おじいちゃん。愛悪の反対の愛善の世界というのは、どんな世界なの？」

「大地、その愛善の世界というのが、天国なんだよ」

「あつ、そうか。そうだよ。地獄の反対だから天国に決まってるよね」

大地は笑いながらそういうと、ガラス戸の外の金竜海に目を向けた。ちようど大きな鯉が一匹飛び跳ねた。その水音を聞いて、松太郎も外に目をやった。

大地は松太郎に視線をもどし話を続けた。

「おじいちゃん、地獄の話はこれくらいにして、やっぱり天国のことを聞いておかないとね」

「そうだな。大地は将来、地獄には行かないだろうから、天国の話をしっかり聞いておいてもらおうかなあ」

「やっぱり、魔王やサタンの世界より、天国の方がいいからね」

二人は、顔を見合わせて笑った。

「おじいちゃん、亡くなった人の精霊が中有界に入って五十日たったら、天国行きと

地獄行きに分かれるんだったよね。天国に行く精霊はどんなふう天国に進んで行くの？」

「それはなあ…」

と、松太郎が天国についての話を始めようとした。すると大地が何かを思い出したように言葉を遮った。

「あつ、おじいちゃん、ちょっと待って」

中有界での面会

「どうしたんだい？」

松太郎は少し身を乗り出して言った。

「ごめんね、おじいちゃん。一つ聞き忘れたことがあるんだけど……」

大地は申し訳なさそうに言った。

「何だい？」

「あのね、テレビドラマなんかで、死ぬ間に、よく“お迎えが来る”って言ってると思うけど、あれってホントに誰かお迎えに来るのかなあ？」

松太郎は大地の質問に軽くうなずきながら答えた。

「“お迎えが来る”というのは、仏教的な言葉で、“来迎”らいじゆうともいうんだけど、臨終の時に、仏さまや菩薩が浄土、あの世から呼びに来られるということで、死期が近くなっているということなんだよ」

「あつ、そういう意味なのかあ。じゃあ、あの世に行くときに、霊界にいる精霊が迎えに来るといふことじゃないんだね」

「そうだなあ。だけど死後、中有界では、先に霊界に行った親しかった人と会うこと

は可能なんだよ」

「えっ、じゃあやっぱり、先に亡くなった家族や友達に会うことができるの？」

「ああ、そうだよ。特にこの世で夫婦や兄弟姉妹だった精霊には、神さまのお許しをいただいて、中有界で会うことができるんだ」

「友達とも会えるのかなあ？」

「特に親しかった友人にも会えるそうだよ」

「そうか、良かった」

大地は笑顔で答えた。

「でも、中有界も広そうだしなあ……。おじいちゃん、どうやって会いたい人を捜すの？」

大地の質問に、松太郎は例のごとくしばらく考えてから、逆に大地に質問した。

「今、大地が友だちといっしょにいるとしよう。場所は、人が大勢集まっているところ。たとえば縁日やイベント会場とか。そこに、大地の友人とその友人の友達の三人で行っていた。友人の友だちとは、その日初めて会ったとしよう」

「はい」

「しばらく歩いていて、あまりの人ごみだったので、大地が二人とはぐれてしまった。

まわりを見ても二人の姿がない。さてその場合、大地はどうする？」

「そりゃあ、まず携帯で連絡するよ」

「そう言うだろうと思った」

松太郎は想定していた答えが返ってきたと、笑いながら言葉が続けた。

「まあ、今の時代はそうだろうなあ。じゃあ、三人とも携帯は持っていないかつたと仮定した場合はどうかな？」

大地は、しばらく目をつぶって考えてから答えた。

「そうだねえ。もし呼び出しする方法がなければ、とにかくその友達が行きそうなところを、一生懸命捜すしかないだろうね」

「そうだろうなあ。じゃあその場合、大地の心の中には、どんな思いが浮かぶかなあ」

「早く捜さないとまずいなあ、って思うだろうね」

「そうだな、そう思うだろうなあ。じゃあその時、大地の頭にはどんな景色が浮かんでるだろうなあ？」

「景色？」

「そう、どんな絵や音が浮かぶかなあ？」

「ああ、そりゃあ、その友達顔や声が浮かぶんじゃないのかなあ？」

「そうだなあ」

松太郎は納得したような口調で言った。

「じゃあ、友人の友達の顔はどうかな？」

「えっ。たぶん、その日初めて会った人だったら、まずすぐには思い浮かばないと思うよ」

「おそらくそうだろうな。やっぱり知らず知らず、親しい友人の顔や声を思い、いろいろ考えながら捜しまわっているだろうなあ」

「そうだと思うよ」

松太郎は少し間をおいて話を続けた。

「それと同じことだよ、大地。中有界で、先に亡くなった自分の家族や兄弟姉妹、それからとても親しかった人に会いたい、と強く思った時、おのずとその人の顔や声が浮かんでくるんだ。ほかにその人との楽しかった思い出の場面なんかも浮かんで来るだろうなあ」

「なるほど、そうだろうね」

「中有界ではそうしたことを思った瞬間、目の前に会いたい人が現れるんだよ」

「えゝ、捜さなくていいの？」

大地は驚いた。

「すごいね、おじいちゃん」

「霊界は現界のような時間や空間がない “思いの世界” “想念の世界” だから、深い情でつながっている精霊同士だったら、お互いの思いが通じればすぐに実現するんだよ」
「へえゝ、それなら携帯で連絡して捜すより、はるかに早いね」

「そうだな」

二人は笑いながら顔を見合わせた。

みろく殿には、時おり参拝者があり、ご神前と祖霊社で祝詞を奏あげている。二人がいる休憩室にはガラス戸越しに、参拝者の拍手の音と祝詞の声が聞こえてくる。大地は、その声の方へ顔を向けた。

「ただし……」

松太郎の言葉に、大地は顔を戻した。

「何、おじいちゃん」

「いったん、中有界で別れた場合は、天国でも地獄でも、再び会うことはないそうだよ」

「え、そりやまた、つらいなあ」

「まあ、人間的にはそう思えるけど、思いの世界である天国では、お互いが同じ愛情や信仰、性格や心情でなければ、いっしょにいることはできないんだ。だから、もし天国でもずつといっしょにいたいのなら、この世にいる間に、お互いが同じ愛情や信仰、性格や心情を持てるようにすればいいんだよ」

「おじいちゃん、簡単に言うけど、それって難しいでしょ」

「その通り、なかなか難しいなあ。それに性格や心情が違うからこそ、人はお互いに切磋琢磨、修行ができるわけだからな」

「なるほど、それがこの世の修行にもなるわけだね」

「そういうことだ」

「ぼくはまだ独身だからわからないけど、特に夫婦の間がそうなのかなあ？」

「大地、その通りだよ。聖師さまがおっしゃるに、中有界でいちばん普通に再会できるのは、夫婦の再会なんだそうだ」

「やっぱり！」

「しかも、この世でどれくらいお互いが情情的に近づいていたかによって、中有界でいっしょにいられる時間が決まるそうだよ。情情的に深くつながっていた夫婦ほど長

「時間を過ごせるんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「もし、現界で夫婦の心の和合が薄かった場合は、ちよつとの時間で別れてしまうそうだよ」

「ということは、この世でケンカばかりして、仲が悪かった夫婦は、あの世でもすぐに別れてしまうということだね」

「そういうことだ。ほとんどすれ違いでの再会の場合もあるのかもしれないなあ」

と、松太郎は苦笑いしながら言った。

「だから、あの世でもいっしょになりたいたくない」、とお互いに嫌っている夫婦だったら、天国で夫婦になることはまずないはずだなあ」

「そうだろうね」

「逆に、あの世でも絶対いっしょになりたいんです」っていう仲のいい夫婦だったら、もしかしたら、天国でも夫婦になれるかもしれないなあ」

「そういうえばおじいちゃん、この世で、仲のいい夫婦は顔も似てくるって言うらしいけど、ホント？」

「そうだね。永年連れ添っているオシドリ夫婦は顔も似てくるもんだね」

「やっぱりそうなのか」

その時、ふと気づいたように大地が言った。

「ということは、自分が会いたくない人には、霊界では会わなくてもすむんだね？」

「そりゃあ、霊界に行つてまで、会いたくない人に会う必要はないだろうよ。ましてや同じ心情の持ち主じゃなければ、会うことはないはずだよ」

「そうだよね」

大地は笑いながら言った。

「先の話だけど、おばあちゃんが亡くなって、そのあとにおじいちゃんが霊界に行つたとしたら、おばあちゃんと会いたい？」

「そりゃあ、会いたいさ。ただ、おばあちゃんが会いたいかどうかは知らないよ。おばあちゃんが会いたくないと思つていたら、会えないかもしれないからなあ」

と、松太郎は少しはにかみ口調で言った。

「いや、それはないでしょ。きつと長い時間をいっしょに過ごすんじゃないかなあ」と、大地も笑顔で返した。

「まあ、おばあちゃんより、おじいちゃんの方が先にあの世へ行くだろうけどなあ」

「いえいえ、お二人ともこの世で、これからもなが〜い時間を過ごしてください」

「そうだな、それが修行だからな」

天国へのアプローチ

松太郎と祖母のともが仲のいい夫婦であることを知っている大地は、松太郎の返答を、ほほ笑ましい思いで聞いていた。

みろく殿内の参拝者は、楽しそうに話をしている。おじいさんと孫の姿を横目に見ながら、ご神前に進んでいった。

大地が口を開いた。

「おじいちゃん、そろそろ天国の話聞かせてもらいたいなあ」

「そうだなあ、じゃあ、天国の話をするでしょうか」

「そう言いながら松太郎は言葉を継いだ。

「さつきも話したけど、臨死体験で霊界を見てきたという実例は世の中にたくさんあるんだ。でも、それは中有界ちゆううかいか、中有界からはるか遠くにある天国の入り口くらいを見て来たものなんだよ」

「そう聖師さまがおっしゃっているんだったよね。おじいちゃんも天国を見てきたわけじゃないもんね」

「もちろんそうだよ」

「見てないのに、天国があるということがわかるんだね」

「わかるというより、信じているんだよ」

「でも、[〃]見てもいないのにわかるはずがないじゃないか、なんて言う人もいると思うなあ」

「もちろん、そういう人もいるなあ。おじいちゃんはその聞かれた時には、いつもこう答えるんだ」

「え、何て？」

「この世の中には、まだ誰も見ていないけど、必ずあるものがあります」

「……」

「それは、[〃]明日[〃]です。明日のこの場所の景色はまだ誰も見ていない。でも、たぶん今日と同じだろうと、誰もが信じている。だけど、もしかすると、何か事故や事件、災害が襲ってきて、今日とは違う景色、状態になっているかもしれないでしょ。でも、明日はありますよね、ってね」

「なるほど」

大地は感心した表情で言った。

「それから、本で読んだり、聞いたりした臨死体験のことも話すんだ」

「あ、聞きたいなあ」

「じゃあ、一つだけ話してあげよう」

「うん」

松太郎は記憶をたどるように少し間を置いてから話し始めた。

「アメリカ人の二十五歳の青年が、自宅で電話中に雷に打たれて“死んだ”んだ。彼は激しい苦痛を感じていたはずなのに、いつのまにか平和で穏やかな気持ちに包み込まれていた。そして、運ばれた病院のベッドに横たわっている“自分”を見下ろしていたんだ。

彼の魂は肉体を離れていたんだね。その時彼は、“自分はもっとハンサムだと思ってたんだがな”と、思ったそうだ。

それから“自分”の横で泣き悲しんでいる奥さんの姿も見ていたんだ。そうやって、いろんな状況を見たあと、体がすごく軽くなり、彼は霊界を旅してきたんだ。トンネルが近づいてきて、闇に包まれたかと思ったら、しばらくするとトンネルの先に光が見えて、そこで、“光の存在”に出会ったんだ」

「光の存在？」

「たぶん、神さまのことなんだろうなあ。そして大きくて深い『愛』に包まれ、喜びが心の底から湧いてきたそうさ。そうしているうちに今度は、自分の人生を回想させられたんだ」

「へえ、すごいね」

「ただ、この青年は、それまでにかなり悪いことをしてきていて、暴力やいじめなんかで、たくさんの人を傷つけていたんだ。だからその回想は、楽しいものじゃなかったんだなあ」

「そうなんだ」

「まるで映画を見ているように、人生の一場面一場面が展開されて、その時の自分の気持ちを思い出すと同時に、自分にやられた相手の悲しい気持ち、怖くてつらい感情を体験させられたんだ」

「それはつらいね」

「それで彼は、自分がしてきたことが、いかに相手の心を傷つけていたのかということを知ることになるんだ」

「なるほど」

「その後、体が重くなつたと思つた瞬間、彼の魂は、自分の肉体に戻っていたんだ」
「すごい体験だね」

「その臨死体験の後、当然、彼の人生観は大きく変わっていったんだ」
「そりゃあそうだろうね」

大地は、感心したような顔で何度もうなづいた。

松太郎は、話を変えた。

「さて、天国の話をするでしょうか」

その松太郎の言葉を受けて、大地は言った。

「中有界で五十日が過ぎた精霊は、いよいよ天国へ行くんだよね」

「そう、天国の住人、つまり“天人”になるんだ」

「精霊から天人になるといふこと？」

「そう、精霊は天国へ行く準備を終えて、天人の資格を持つてから、自分が進むべき天国への道を進んでいくんだ」

「天国といつても広いんだろうね」

「そりゃあ広いさ。何せ無限だからね」

「そっか、靈界だもんね」

「自分が行く目的地はわかるのかなあ？」

「その天人が所属すべき団体が、目的地になるんだよ」

「え、団体に所属するの？ 僕は人見知りするから、団体に入るのは苦手だけどなあ」
大地は不安気な表情で言った。

「大地、心配する必要はまったくないんだよ。本当に気心の知れた親友といえるような気持ちになれる団体だから、気を遣うような心配は無用なんだ。聖師さまは、天国のことを「たましいふるさと 靈魂の故郷」とおっしゃっていて、それぞれの天人にとつて、とても落ち着く場所なんだよ」

「そうなのなあ、ちよつと安心かな。で、その団体は何人くらいいるの？」

「少ない団体だと、四、五十人らしいなあ」

「学校の一クラスくらいだね」

「そうだなあ。大きな団体になると、五千人、一万人、三万人、五万人、十万人という団体もあるんだ」

「へえ、市や町みたいなものだね」

「それぞれの団体に所属している天人は、自分の団体が一人でも多くなることを望んでいるから、新人の天人をとつても歓迎してくれるそうだよ」

「それは有り難いなあ」

大地は笑顔で答えて、質問を続けた。

「自分が行くべき団体が、どれくらいの人数なのかは、行つてみないとわからないということだよね」

「まあ、そういうことだな」

「それで、そこへ行く道は、どうやってわかるの」

「中有界から天国の各団体に通じる入り口は、ただ一本の細い道があつて、その道をドンドン上つていくと、道は数本に分かれていて、そのうちの一本を進んでいくと、またその先は数十本にも分かれていて、それぞれの道が各団体に通じているんだよ」

「えー、そんなにたくさん道の道があるんだったら、自分の進む道がわからなくて、迷つてしまいそうだね。おじいちゃん、その道がわかるような、何か『案内板』でもあるの？」

「いやいや、たくさん道があるというのは、神さまの目から見てのことで、天人には、

自分の進むべき道だけが見えるから、迷うことはないんだ」

「つまり、目の前の見える道を進んでいけばいいんだね」

「そうだなあ。あるいは、この道を進みたい」と思った道を進むと、間違はなく自分の進むべき道を行けるんだよ。それが霊界だからな」

「あつ、そうか。霊界は、意志・想念（いし・そんねん）の世界だったね」

「そういうことだ」

松太郎も笑顔で答えた。

「天国の団体は数えきれないほどあるんだけど、それも段階ごとに無数にあるんだよ」

「段階ごとになって、どういうこと？」

「天国は大きくわけて三つにわかれているんだ」

「三つに？」

「中有界に近いところから、第三天国、次が第二天国、その上が第一天国と言うんだよ。そして、その上に神さまがいらつしやるところがあるんだ」

「天国にも階級があるんだね」

「実は、第三から第一までの天国のそれぞれが、また三段になっていて、その一段が

さらに二十段にわかれてるんだ」

「おじいちゃん、ちょっと待ってよ。ということは、三三さんざんが九で、その一つが二十段ということだから…」

大地は暗算してみた。

「百八十段もあるということだね」

「プラス神さまがいらつしやる場所があるから、百八十一段になるんだよ」

「あらら、たくさんだね。ということは、神さまがおられるところを除いた百八十段のそれぞれに、無数の団体があるということなんだね」

「そういうことになるなあ」

「それで、天人自身は、自分がどの段階のどの団体にいるということはわかるの？」

「いや、それはわからないと思うなあ。ただ、天人には常に良くなろうとする向上心があるから、より高い段階、より高い団体に進もうという努力はかかさなんだよ」

「へえ、天人さんって、がんばり屋さんなんだね」

「ただ、一段上がるにも相当な時間が必要なんだよ」

「どのくらい」

「それはなあ…」

大地は身を乗り出した。

写し世

「天国の階級は、一段上がるのに六十年かかるそうだ」

「ええ、そんなにかかるの？」

大地は松太郎の答えに、思わず身をそらした。

「そりゃあまた、たいへんな時間だね、おじいちゃん」

「そうなんだ。聖師さまは、最奥天国を除いた百八十段の天国の階級について、

ももやそのみはしをのぼるれいこんは

むちとせたちでももはしをのぼる(※注1)

というお歌を詠んでおられるんだ」

「えー、よくわからないなあ」

「聞いただけだとわかりにくいかもしれないな。ももやそのみはし(百八十の神階)というの、百八十の天国の階級のこと、そこをのぼる天人は、むちとせ、つまり六千年たって、ももはし、百段をのぼるんですよ、っていうことなんだ」

「おじいちゃんは、よくそんな難しい歌をおぼえているよねえ」

「まあな」

「えーっと、六千年で百段ということは、確かに一段上がるのに、六十年かかるということだね」

「まあ、おそらくこの六十年というのは、現界の時間に直した場合ということだと思
うから、霊界の時間だったら、もっと長い月日が必要のようだなあ。聖師さまは、『五百
歳が霊魂の一代である』という意味のお歌（※注②）も残してもおられるので、いずれ
にしても、相当な時間が必要だということだなあ」

「五百歳とはまた、長過ぎるなあ」

と言いながら、大地は何か気づいたような口調で話を続けた。

「おじいちゃんがさっき言ってたよね。この世では肉体があるから修行がしやすくて、
霊界に行ったら肉体がなくて、霊魂だけになるから、修行するのが難しくなるって」
「そうだなあ」

「だからそんなに時間がかかるんだね。でもそうすると、天国で六十年かかる修行を、
この世なら、もしかすると、もっと短い時間でクリアできるのかもしれないね」

「そうだな。この世で、ものすごくがんばって身魂を磨いたら、もしかすると一生の
間で、二段も三段も上がることができるとかかもしれないなあ。そう考えると、この世
で肉体をいただいて修行をさせていただけるといふことは、有り難いことなんだと思

うんだよ」

「なるほど」

大地は松太郎の言葉にうなずき、顔を上げて、話題を変えた。

「ところで、そうやって天人が、天国の行くべき階級に進んで、行くべき団体に所属してからは、どんなところに住むの？」

「天人の住居ということだな」

「そうそう」

「天国にはこの世と同じように、風景や住所や家屋があつて天人が生活しているんだ。天人の暮らしは、この世の人間の生活とよく似ているそうだ」

「へえ〜？」

「昔から、この世、現界のことを『現世』と書いて『うつしよ』というんだ。『うつしよ』というのは、『写す世』ということで、霊界を写した世界ということだな…」

「写し世ねえ」

「映画に例えてい^{たと}うと、映写機にかけるフィルムの映像が『霊界』で、映画館のスクリーンに映し出された映像が『現界』ということなんだ」

「なるほど、つまりフィルムが元で、スクリーンの映像は写されたものということだね」
「そう。霊界にあること、霊界にあるものが、現界に写ることだから、霊界の住居や風景がなければ、現界の住居や風景もないということになるんだ」

「そうか、何にも写ってないフィルムをどれだけ投影しても、スクリーンに映像は映らないもんね」

「そういうことだ、大地」

「でもおじいちゃん、映像の質は、原版フィルムの善しあしによっても違うんじゃない？」

「……というと？」

「たとえば、画質の悪い映像フィルムだったら、スクリーンに映る映像もクリアじゃないだろうし、最近のデジタル画像のようにきれいな映像がフィルムに収められていたら、スクリーン上の映像も鮮明だと思うんだ。だから、霊界の善しあしも、そのまま現界に写ってくるのかなあ、と違ってね」

「そうだなあ、一元である霊界は現界にとつて、とつても大切だということだな」

と松太郎は自分自身の言葉を確かめるように返答し、さらに話を続けた。

「それにもう一つ」

「なに？」

「映像を映し出すスクリーンそのものも大切なんだ」

「つまり現界も大切ということ？」

「もちろんそういうことだ。大地、スクリーンは普通白い色をしているなあ」

「当然そうだね」

「でも、これがもし黒色だったらどうだろうか？」

「いや、それはあり得ないよ。映像がきれいに映るわけがないもん」

「そうだなあ、じゃあ、灰色だったり、黄色だったり、色がついていたらどうかな？」

「それも見にくいよ」

「そうだなあ。じゃあ、白色であっても、ところどころ汚れていたら……」

「それも、汚れが気になって映画に集中できないかもしれないよね」

「そうだろう」

「あつ、なるほど、だからこの世もきれいにしておかないといけないということだね」

大地は、納得したような表情で言った。

「そうだなあ。神さまは、この世の中の環境も、できるだけ清らかにしてほしいと願っ

ておられるんだ。きれいなスクリーンで、きれいな映像を見ていたら、映画をみている観客の心もすがすがしくなるからなあ」

「なるほど、スクリーンが環境で、観客が現界人ということだね」

と言ったあと、大地は首をかしげて、少し間をおいてから質問した。

「おじいちゃんが、＼みたままつり＼の話をした時に教えてくれたよね、この世の＼人の思い＼が霊界の縁ある人に通じるって。……とすれば、霊界の縁ある人というのは、この映画の場合、誰に当たるのかなあ？」

大地の意表をついた質問に、松太郎は驚いた。

そこで、例のごとくしばらく考えてから話を続けた。

「そうだなあ…、霊界の縁ある人というのは、＼実際には存在するけど、映画館では会うことがない人たち＼ということじゃないかな。だから、さしずめそのフィルムを作った人たちじゃないかなあ」

「フィルムを作った人たち？」

「つまり、その映画製作に携わった監督や出演者、スタッフということだよ。そして、観客がその映画に感動し、映画の評判が高くなれば、製作関係者もみなうれいだろ

うし、仕事の励みになる。そうすればまた新しいより良い作品、つまりフィルムが
来上がるんじゃないかな」

「なるほど、それが繰り返されれば、映画を作る人も見る人も、お互いに良い思いに
なれるよね」

「そう、霊界の天人も現界の人間も、お互いに向上できるといふことだなあ」

松太郎の話を聞きながら、大地は何度もうなずいた。

松太郎も、大地の納得した表情を見て安心した気持ちになっていた。

すると、大地がさらに質問を重ねた。

「ねえおじいちゃん、最近は、映画も3Dで立体的になって、専用のメガネをかけて
見るようになってきてるんだけど、これって何に例えられるのかなあ？」

「おいおい大地、そこまで例えなくていいだろう」

松太郎は困ったような表情で言った。

「アハハ、おじいちゃん冗談だよ」

大地はちゃめっ気な笑顔で言った。

「コラ、大地！ からかうな」

松太郎も好々爺こうこうやの顔になっていた。

※注1

ももやそ
みはし
れいこん
むちとせ
た
ももはし
百八十の神階をのぼる靈魂は六千年経ちて百段をのぼる

※注2

いほとせ
みたま
れいこん
ひとよ
五百歳に人の靈魂は昇るなりこれ靈魂の一代とぞいふ

〔「東の光」から〕

天人の職業

みろく殿南側の小部屋に入ってから、一時間以上は過ぎただろうか。暖房が効いた小部屋のガラス戸はうっすらと曇っている。神苑の樹々に残っていた雪もおおかた溶け落ちてしまったようだ。

大地は、湯呑みに少し残っていたお茶を飲み干した。急須を持つと、まだお湯が入っている手応えがあった。

「おじいちゃん、お茶入れようか。だいぶぬるいけどね」

「まだあったのか。じゃあ、もらおうか」

大地は、松太郎の湯呑みにお茶を注いだ。

「でも、ここからの景色はきれいだねえ」

大地はお茶を入れながら言った。

「そうだなあ、ここから見る金竜海は格別だなあ。昨日が立春だったせいかな、今日の景色は一段ときれいに見えるなあ」

「どうぞ」

「おおっ、ありがとう」

松太郎はそういうと、湯呑みを持ってお茶をすすった。

「ほんとに、ぬるいなあ」

「だよね」

大地は笑いながら急須に残ったお茶を、自分の湯呑みに注ぎ切った。その湯呑みを手に取り一口飲むと、大地は外に目をやり、独り言のように言った。

「天国の天人は、いつも何をしてるのかなあ？」

「んん、何？」

大地の言葉が聞こえなかったのか、松太郎が尋ねた。

「あ、いやね、天国の天人って毎日何をして生活しているのかなあ、と思ってね」

大地の質問に松太郎は、また例のごとく聞き返した。

「大地は、天人さんたちは何をしていると思う？」

「あつ、また逆質問ですか」

大地はニヤリとしながらも素直に答えた。

「たぶん、自分の好きなことをして遊んでるんじゃないかなあ」

その答えを聞きながら、松太郎はお茶を飲み終え、湯呑みをテーブルに置いてからしゃべり出した。

「実はなあ大地、天国にも職業があるんだよ」

「へえ、そうなの？」

「天国には、この世と同じように、海や山や川、平野もあって、草木も育ち農地もあるんだ。ただ違うのは、この世よりもすべての景色が格段に美しいことだ。そこで天人たちは、所属する団体の中で、自分の能力にあつた仕事をしているんだよ」

「へえ、仕事をしてるんだ」

「そう、決して遊びほうけているわけじゃないんだ。天国だから、文字通りの『天職』を楽しんで、それぞれがお互いのために、団体のために、神さまのために、喜んで仕事をしているんだ。つまりは、自分のためでなく、神さまのご用に立てるような仕事をしているということなんだ」

大地は黙つてうなずいている。松太郎は説明を続けた。

「いいかい大地、神さまが宇宙や、あの世とこの世を造られたのは、目的があつたことなんだ。つまり用があるから造られた」

「用？」

「今日はちょっと用事があるから、っていう、あの用事と同じで、ご用」というこ

とだな。人間の用事ではなくて、神さまの「ご用」。平たくいうと、神さまのお仕事ということだなあ」

「神さまのお仕事？」

大地は、首をか上げた。

「そう、神さまのお仕事。神さまのなさる業わざということだから、大本では「ご神業」と言っているんだ」

「ご神業」

大地は松太郎の言葉を繰り返した。

「つまりは、天国の天人たちは、ご神業、神さまのご用のために、毎日嬉き々きとして働いているんだよ。だから誰一人として、この世のように金もうけのためとか、私利私欲のためとかということで働いている者はいないんだ。それがこの世とは決定的に違うということだな」

「へえ、それでみんな楽しいのかなあ？」

「そりゃあ楽しいさ。仕事上でのトラブルはないし、もちろん政治や経済の問題、思想的な問題もないから、とつても平和で幸福な生活なんだ」

「そりゃあ、天国だもんね」

大地は笑いながらうなずいた。

「天人個人の心は、団体みんなの心、団体一同の心は、天人一人一人の心と同じということだな」

「そうか、やっぱりそういう天人同士が、同じ団体に集まっているということだもんね」
「そういうことだな」

「それから聖師さまは、天国にも『土農工商』の区別があるとおっしゃっているんだ」
「えっ、『土農工商』ってあの江戸時代のの？」

「いやいや、江戸時代の『土農工商』とは違う。農業と工業・職人、商人は同じようなものだけど、武士はさすがにいないんだ」

「じゃあ、士は何？」

「士というのは、神さまの教え、誠の道を多くの天人に教え伝えることを仕事としている天人のことだ。その天人を『宣伝使』というんだ」

「宣伝使……」

「だから大本では、この世でも神さまのみ教えを宣べ伝える人を『宣伝使』として任命しているんだ」

「じゃあ、おじいちゃんも『宣伝使』なんだね」

「まあ、一応な」

「だから、いろんなこと、こんなに詳しいんだね」

大地は納得したような口調で言ったあと、ふと表情を変えて言葉を続けた。

「ねえ、おじいちゃん。今、この現界は『格差社会』と言われるけど、天国でも『農工商』のような区別があるということは、やっぱり格差があったり、貧富の差があったりすることじゃないの？」

松太郎は、大地の質問にうなずきながら言葉を返した。

「天国にも貧富の『区別』はあるんだよ」

「え、やっぱりあるの！」

「でも、この世の貧富の差とは違って区別なんだ」

「ん、そうこなくっちゃ」

大地はまた笑いながら言った。

「天国では、天人各自の働きによって報酬を得るということではなくて、すべては神さまのもので、あらゆることは神さまに『させていただく』という考えを、どの天人

も持つているんだ。神さまによって生かしていただいているんだという気持ちで、日々感謝の生活をしているから、貧富の区別があっても、現界のように、貧しい者は決して富める者を恨まないんだ。それにもともと、天人それぞれの念頭に、貧富という感覚がないんだ。貧富自体もみな神さまから賜るもので、天人各自の努力によって得るものでもないんだよ」

「……」

「それは、この世にいる間にその人が、どれだけ善を尽くし、徳を積んできたかによるわけで、それが天国に來てもそのまま自然に貧富の区別になるというわけなんだよ」「つまり、現界ではどれだけ財産や富を持っているかで左右される貧富の差だけでなく、天国での貧富は、生きている間にどれだけ、世のため人のために尽くしてきたか、ということなんだね」

「その通りだよ、大地」

「じゃあ、天国でお金持ち、というか富める天人になるためにはどうしたらいいの?」「まあ、天国で金持ちになりたい、という野心を持った時点で、そこに“自分”という思いが強く出ているから、すでに難しいかもな」

松太郎は笑いながら大地の顔を見た。

「なるほど。ということとは、そんなことも思わない方がいいんだね。野望は禁物ということだね」

「まあ、そうだな。あとは……」

「あとは、何？」

大地は、身をのりだした。

天国の貧富

「それは…」

松太郎は少し間を置いた。

「何なに？」

大地はじれったさそうにたたみかけた。

「いちばん大切なことは、神さまのことをしっかりと理解することなんだ」

「神さまのことを？」

「そう、まずは神さまがいらっしやるんだ、ということを感じるんだな」

「僕は何となく信じてるけどなあ」

「そうか、大地は信じてるか。それならいいんだ」

「何となくだよ」

松太郎は、大地の言葉をうれしそうに聞きながら話を続けた。

「信じるということにも、*〃*信じようと思つた、*〃*信じているつもり、*〃*そして、*〃*信じ切る、*〃*というように、段階があつてなあ。大地は、今二番目くらいかなあ」

「なるほど、そうかもしれないなあ」

大地は納得したようにうなずいた。

「もつとも、大地が神さまを信じてなかったら、おじいちゃんのかな話も聞く気にならないだろうがなあ」

「そうだね」

大地は笑いながら言った。

「まあ今は、それでもいい。でも、これから長い人生を生きていく間に、神さまを信じて切れる。ようになってくれれば、おじいちゃんは何よりうれしいよ」

「うん、努力するよ」

「大地、むかしの人たちは、大自然そのものが神さまだと思い、その大自然によって人は生かされていると考えていたんだ。だから人間も自然の一部という発想で、自然に逆らわず、自分たちの生活を自然に合わせるようにして暮らしていたんだ。でも、時代が進み、特に近代になってからは、人間が都合のいいように自然を変えて、自分たちの生活により便利になるように手を加えてきた。あげくの果てには、人間が自然を征服できると錯覚してしまったところに大きな間違いがあったんだよ。これはほんでもないおごりで、神さまに対して、とつても申し訳ないことなんだ」

「環境破壊も人間の仕業だもんね」

「そうだなあ。そもそも、『環境』という言葉自体、昔はなかったんだからなあ」

「へえ、そうなんだ」

「とにかく、人は生きているんじゃないかと、大自然の力、神さまによって生かされているということを自覚することが、まず大切なことなんだ。それが、天国で富める天人になるための第一条件ということだな」

大地は、無言でうなずいた。

「それから、日常の生活では、国祖の神さまが願っておられるように、『われよし』、つよいものがちの心を持たないようにして、神さまのため、世のため、人のために、自分にできることを精いっぱい実践していくことだな」

「それって、けっこう難しいことだと思っただけだなあ……」

「そう、簡単じゃあないけど、まずはそういう『意識』を持つことだな。現実的には、すべき仕事をキチンとして、働いて得たものの中から、余財を神さまのご用のためにささげることだな。聖師さまは、そのことを『宝を天国の庫くらに積んでおく』とおっしゃっているんだよ」

「宝を天国の庫に……、ん、よくわからないなあ」

松太郎は、「そうだろうなあ」という表情を浮かべながら、話を続けた。

「大地、この世での現実的な財産でまず思いつくのは？」

「まあ、お金だろうね」

「そうだな。そのお金はいろんな方法で自分の手元に入ってくるだろう」

「仕事をして稼ぐのが普通だよ」

「その稼いだお金は、どうするかな？」

「必要な分は使って、貯金するんじゃない。最近は金利が低いから、タンス預金する人も多くなって聞いたことあるけど、普通は銀行や郵便局なんかに預けておくんじゃない？」

「そうだな。その中から、その人にできる範囲でいいから、神さまのご用に使っているだけと浄財をささげることが、天国の銀行に預けることになるんだよ。それが宝を天国の庫に積んでおく、ということなんだ」

「おじいちゃん、この世の銀行のように天国の銀行でも利子は付くの？」

「もちろんちゃんと付くよ。でもそれは、預けた人のまごころ次第で変わるんだよ。義務感やイヤイヤながら預けても神さまは喜ばれないからね」

「変動制なんだね？」

大地はニコリとしながら言った。

「まごころ変動制かな」

「なるほどね」

「人間だってそうだろう。もし、大地が欲しいなあ、って思っている物を友だちが持っていて、それを友だちが快く譲ってくれたらうれしいだろう。でも、大地があまりにしつこく欲しかったからって、仕方なくイヤイヤくれたら、大地もあんまりいい気分じゃないんじゃないかなあ」

「そりゃあ、そうだね。それに相手の執着心はその物に残るようで、気分がよくないかもしれないね」

「そうだろう、それと同じことだ。『神さまどうぞ使ってください』と、気持ちよくまごころ込めてささげられたら、神さまも喜んで使われるんだよ。おまけに、思ってもみない『お礼』を頂いたりすることもあるんだよ」

「などほど、それが利子になるんだね」

「そういうことだなあ。でも、最初からその利子を当てにしてたら、それは『まごこ

る」とは言わないからな」

「あつ、そりゃあそうだね」

大地は、苦笑いした。

松太郎はふと思ひ出したように、話を続けた。

「そうそう、おじいちゃんの知り合いで商売をしてて、どうにも仕事がうまくいかず困り果てていた人がいたんだ。人事は尽くしたんだけど、もう商売もやめなければならぬかもしれないというところまで追い込まれてしまった。それで、あとは、神さまにお任せするしかない」と、手元にあつたすべてのお金を持って聖地にお参りし、そのお金を全部お玉串としてお供えしたんだ。ところが、それから家に帰ると、思わぬところから仕事の依頼が来て、窮地を救っていただいた、というおかげ話もあるんだよ」

「それは、すごいね」

大地は感心したような表情で言った。

「それから天国で富める天人になるためには、もう一つ大切なことがあるんだ」

「何？」

「それは、生きている間にしっかり『徳』を積むことだな」

「徳かあ」

「しかも陰徳と言って、人に知れないように徳を積むことが大切なんだ」

「ん、まだ僕には難しいかも」

「まあ、おいおいわかってくるから、心配しなくてもいいよ。それよりも今はまず、大学を卒業して、ちゃんと就職することがいちばんだな」

「あ、現実引き戻された感じだなあ」

大地は、松太郎から視線をそらし、窓の外の金竜海に目をやった。

その時、松太郎のズボンのポケットで、携帯電話の呼び出し音が鳴った。松太郎は携帯を取り出し、開いて画面を確認した。

「おっ、うちからだ。はい、もしもし」

二人がなかなか帰ってこないで、心配した祖母ともからの電話であった。

「わかった、今から帰るから」

そう言って電話を切り、松太郎は携帯をポケットに押し込んだ。

「おばあちゃんが待つてるから帰ろうか、大地」

「そうだね、すっかり長居してしまったからね」

大地が湯呑みと急須をお盆に乗せている間に、松太郎がファンヒーターのスイッチを切つてゆっくり立ち上がった。それに合わせて、大地はお盆を持って立ち、松太郎に続いて部屋を出て受付まで進んだ。

「ごちそうさまでした」

お礼を言うと、お盆ごと受付に返し、出口に向かった。後ろから、「お気をつけて」という言葉が聞こえた。お茶を出してくれた女性であった。

「ありがとうございます」

大地は振り返つて、ていねいに頭を下げた。

玄関の階段を下り、靴を履いてみろく殿前の石橋を渡った。玉砂利を踏みしめる音が心地よく、空気はヒンヤリしているものの、あまり寒さは感じなかった。

松太郎が振り返り、みろく殿に向かって頭を下げた。大地もそれに続いた。

頭を上げた大地は、いつになくさわやかな気分になっていることに気づき、何だか不思議な気持ちであった。

三、節分こぼれ話

節分の「うどん店」

大地は、松太郎の所作をまねて、みろく殿正面の「榎」の神木にお辞儀をしてから頭を上げ、左の方に目をやった。

朝、二人が来た時にはまだ立っていた節分大祭の「うどん店」の大テントは、天幕がはずされ、脚もたたまれ、みろく殿前の広場は、もとの広々とした空間にもどつていた。

十人ほどの人が、テントの脚をトラックに積み込む作業をしている。

「あれ、もうテントがなくなっているね」

「毎年、立春の翌日に亀岡からも本部の職員の人たちが手伝いに来て、撤収作業をするようだなあ。手際いいもんだ」

作業の様子を眺めながら、大地が口を開いた。

「節分の時のうどんはおいしかったなあ」

「そうだなあ。毎年あのうどんをいただくのが楽しみだからな」

「和知川での人型流しにお参りして、ここまで帰ってきたときには、体が冷えきつたから、あのうどんを食べて温まったよ」

「今は、本部の青年部が担当して、地方からも大勢の青年たちがお手伝いにやって来て、うどん接待をやっているんだ」

「そうそう、テントの中に入ったら、＼いらっしやいませー＼って、元気な声が飛び交っていたよ」

二人は話をしながら、松香館前の駐車場に向かった。

「あの、うどん店」は朝までやってたの？」

「あ、いや、今はいろんな事情から一回目の瀬織津姫行事が終わってしばらくしたら店じまいしているようだなあ」

「そうなんだ？」

「でもなあ、おじいちゃんが若いころは、大祭が終わって朝までやってたんだ」

「えっ、おじいちゃんもやってたの？」

「もちろん」

松太郎は、ちよつと得意げに言った。

「じゃあ、かなり昔から『うどん店』はあつたんだね」

「そうだよ」

松太郎はそう言いながら、車のドアを開けた。

「まあ、車に乗ってから話そう」

「そうだね。立ち話じゃあ寒いしね」

二人は軽トラに乗り込み、ドアを閉めた。シートベルトを締めて、松太郎はエンジンをかけ、車を発進させた。梅松苑を出て右折し、すぐの信号を左に折れた。この通りは「大本商店街」と呼ばれ、大本を協賛する店舗が軒を連ねている。

「ここは夕べつぼをかかえた瀬織津姫さんたちと歩いた道だよ」

「そうだよ。まだ『祝大本節分大祭』のはり紙が張つてあるね」

「綾部では、ありがたいことに大本協賛会というのがあつてなあ、市長さんをはじめ、大本に対して市民のみなさんがいろいろと協力してくださるんだよ」

「へえ、それはいいねえ」

「節分の『うどん店』には、市民も大勢来てもらっているしなあ」

「そうそう、グうどん店 の話だったね。おじいちゃんも若いころに手伝っていたって
言ってたよね」

大地は思い出したように松太郎に問いかけた。

「ああ、そうだよ。昔は今よりもっと盛大にやってたんだ」

「昔って、どのくらい前から？」

「そりゃあ歴史をさかのぼったら古いぞ。そうだなあ、半世紀くらい前になるんじゃないかなあ」

「えっ、ということは五十年前からということ」

「そういうことだなあ」

「大本は昭和十年に第二次大本事件というすさまじい宗教弾圧を受けたんだ。相手は
当時の国家だったんだ。もちろん大本は何も悪いことはしてなかったから、今でいう
えんざい冤罪だったわけだ」

「その話は少し聞いたことがあるけど、ひどい話だよね」

「その事件が解決して、昭和二十一年に、大本は新たにスタートしたんだけど、その
直後の節分大祭から、うどんの振る舞いがあったそうさ。当時は地元の青年たちが担

当していたんだ。その後二、三年中断することがあって、昭和四十年から再開したんだよ」

「じゃあ、その時におじいちゃんもいたんだね」

「そうだよ。その前の年の確か三月末だったかなあ、地元綾部の所帯を持った若い信徒で、あゆみ会」というのを組織してなあ。五十人くらいいたと思うが、その会で、節分の夜に、うどん店」をするようになったんだ」

「その頃は、朝までやってたんだね」

「当時はおじいちゃんも若かったし、もつと活気があったなあ」

ハンドルを握ったまま、松太郎はなつかしそうにほほえんだ。

「今どれくらい作っているか知らないけど、多い時には、六千食くらい作っていたんだ。大きな鍋もなかったから、だしはドラム缶を使って、二缶も作ってたのをおぼえていよるよ」

「へえ、ドラム缶！ また大胆だねえ」

大地はびっくりした表情で言った。

「あの頃、地元うどん屋に麺を卸している製麺所が市内に三軒あって、作った麺を

片っ端から運んで来てうどんを作ってたなあ」

「すごいね」

「だから、翌日綾部市内には麵がなくて、地元のおうどん屋が商売できないくらいになった、っていう面白い話もあるくらいだ」

「おもしろい！」

「朝まで“うどん店”を出していたのは、大祭が終わって、地方からご奉仕された祭員と瀬織津姫が、みんなあのおうどんを食べるのを楽しみにしてたからなんだ。だから、祭員と瀬織津姫の分は、ちゃんと確保しててなあ」

「そうか、当時だったら今のように交通の便が発達してなかっただろうから、地方から綾部に来られるのは一大事だったんだね」

「その通りだよ大地。夜行列車に揺られながらここまで来られる信者さんも多かったんだよ。だから、地元の若い者で、少しでもそのご苦労をねぎらわせてもらいたくて、おじいちゃんたちもがんばっていたんだ」

「良い話だね」

「なつかしい時代だよ」

車はJ R綾部駅の前を左折し、府道8号線を北へ走っている。もう雪はほとんど残っていないかった。

「十六年間くらい続けたかなあ」

松太郎は言った。

「その『うどん店』を？」

大地が聞いた。

「確か昭和五十七年ころからは、四国の香川主会の信者さんたちがご奉仕してたなあ」

「さぬきうどんだね」

「あの時のうどんも、おいしかったよ」

「そうだろうね。で、今は？」

「今は、本部の青年部が中心になって、地方からの青年がたくさんご奉仕に来て、がんばってくれているんだ。でもああして続いているということは、ありがたいことだよ」

「そうだね」

「大地も一度、その奉仕団に入って、お手伝いしたらいいんじゃないか。学校の友だちとはまた違った友だちもできるぞ」

「あつ、そ、そうだね。機会があったらね」

大地はちよつと困つた表情で答えた。

車中では話がとぎれることはなかつた。松太郎の家に着くと、二人は車から降り、大地が先に玄関を開けた。

「ただいま、今帰りました」

「おかえり」

奥から祖母・ともの声がした。

(続く)

「暁の大地」第1巻
おわり